

第81号

会報

一般社団法人 函館文化会

〒042-0955 函館市高丘町51番1号
学校法人野又学園 函館大学内
電話・FAX (0138) 57-1175
E-mail bunkakai@host.or.jp
URL http://hakodate-bunkakai.com/

函館競馬場で市民公開講座



パドックシートで講座

第6回 市民公開講座は、「函館競馬場」をテーマにJRA函館競馬場で開催しました。講座には、競馬雑誌「優駿」の取材で函館訪問中の俳優 山本學さんがサプライズで会場に訪れ、連載中の競馬史の一端を披露した後、市民と一緒に最後まで聴講しておりました。

講座終了後、普段立ち入ることのできない馬主席から競馬場のコースや市街地を眺め、ウイナーズサークルではサラブレッドと触れ合うこともできました。(講座の内容は14ページに)



ウイナーズサークルから観覧席を臨む



山本學氏を囲んで記念撮影

函館文化会 会報 第81号 目次

函館競馬場で市民公開講座	1
令和元年度定時総会を開催 ～事業報告・決算を承認～	2
函館文化会ホームページ・ブログの開設について	2
スポーツ文化 会長 金山 正智	3
函館文化会役員名簿(平成30年度定時総会選任)	3
平成30年神山茂奨励賞 はこだて外国人居留地研究会様に贈呈	4
神山茂奨励賞受賞記念講演 函館開港と異文化受容について はこだて外国人居留地研究会会長 清水 憲朔	4
函館文化会講演会 平成30年度講演会・講演録 函館は文化の十字路 ～様々な宗教の中で育まれてきた街～ 北海道教育大学名誉教授 佐々木 馨	8
令和元年函館文化会講演会案内 ～最後の箱館奉行 松浦兵庫頭誠～	13
函館文化会・市民公開講座 第6回 近代競馬の誕生と函館競馬場 JRA競馬博物館学芸員 秋永 和彦	14
第7回 湯の川温泉いまむかし 元湯川町1丁目町会長 村山 信夫	18

卓 話 第16回 伝えていきたい“昔の遊び” 北海道教育大学非常勤講師 藤井 良江	21
特集 函館の歴史と文化を語り継ぐ④ ～テーマ「五稜郭界限」～ 五稜郭地区の移り変わり 中野 豊	24
行啓通り遙か 小熊 庸介	25
子ども時代を過ごした五稜郭 向出 悦子	27
「青雲台」での思い出 吉田 栄一	29
私の五稜郭公園 伊藤 暁	30
函館野外劇と私 幸野三和子	32
特別寄稿 須藤隆仙先生を偲ぶ 近江 幸雄	34
函館文化会会員募集・助成制度	35
特別寄稿 クリミア戦争が運んできた五稜郭と旧幕府軍工兵が造った四稜郭 野戸 崇治	36
第7回市民公開講座は湯倉神社で開催	38
会務報告 平成30年度事業報告・収支決算	39
函館文化会会員名簿(R1.10.1現在)	42
編集後記	42

令和元年度定時総会を開催 ～事業報告・決算を承認～

一般社団法人函館文化会では、令和元年度定時総会を5月28日(火)午後1時30分からフォーポイントバイシェラトン函館において、会員総数145名のうち125名(委任状出席を含む)が出席し開催、提出された議案・報告は全て原案のとおり承認・了承し、終了いたしました。

以下、定時総会の内容について、その概要をお知らせいたします。

定時総会は、金山正智会長から「会員が増え、会員相互の交流が会の運営にとって重要である。今年も、会員同士の顔が見える活動に工夫したい」との挨拶の後、定款の定めにより会長が議長となり議事に入りました。

今定時総会に付議された議案・報告は

- 議案第1 平成30年度事業報告について
- 議案第2 平成30年度収支決算及び監査報告について
- 報告第1 平成30年度収支補正予算について
- 報告第2 令和元年度事業計画について
- 報告第3 令和元年度収支予算について
- 報告第4 「講演会」の開催について



の6件で、議案第1、議案第2及び報告第1は関連があることから事務局から一括して説明、次いで監事から5月23日実施した監査について「経理については正確かつ適正に行われており、また、事業も事業計画に基づき適正に行われていたと認める」との監査結果の報告があり、審議の結果、いずれも満場一致で承認・了承されました。

なお、承認された平成30年度事業報告・収支決算については、別掲(39ページ)のとおりです。

また、3月20日の平成30年度第5回理事会で議決した令和元年度事業計画・収支予算について、報告第2及び報告第3として説明がありいずれも満場一致で了承されました。事業計画の主なものは、「神山茂賞の贈呈」を継続して実施、同日開催の「受賞者を祝う会」には今年も多くの方に参加を呼びかけ、会員交流の場にもすること、また、「函館文化会講演会」は、10月12日(土)函館市中央図書館で、元市立函館博物館長の田原良信氏を講師に「最後の箱館奉行 杉浦兵頭頭誠」と題し開催予定、さらに「郷土の歴史・文化等を学び・探求しながら、受け継がれてきた“郷土の文化”を後世に継承する」ことを目的として開催しております「市民公開講座」、今年度も継続して実施することなどが報告されました。

函館文化会「ホームページ」、「ブログ」の開設

インターネットの普及により、企業・団体等がホームページを持っていることが当たり前になっており、「函館文化会」に対する信頼度を向上していくには、会員を含めたユーザーの求める情報を常に発信していくことが必要です。

こうした中で「函館文化会」の知名度の向上と活動の推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び案内、報告などの情報を、インターネットを通じて全国・世界に発信することを目的に函館文化会「ホームページ」、「ブログ」を開設しております。一度ご覧いただき、ご感想・ご要望など事務局にお寄せください。

アドレスは、次のとおりです。

- ホームページ <http://hakodate-bunkakai.com/>
- ブログ <http://blog.livedoor.jp/bunkakai/>



会長挨拶

スポーツ文化

一般社団法人 函館文化会 会長 金山正智



今年のテニスウインブルドン大会決勝は、ジョコビッチ、フェデラー両強豪の対戦となった。最後はジョコビッチが勝利を手にするが、両者白熱の競り合いは、実に五時間に及んだ。互いが交わす一球一球には、コースや緩急にそれぞれ意味がある。テレビは、スロービデオや多角映像などその機能を駆使し、目にもとまらぬ二人の名人技を微に入り細を穿って解き明かしてくれる。また、「力が入っていないから速く強い球が打てる」、解説はテニスの極意にふれながら、長い鍛錬と葛藤の時間にまで話が及ぶ。

スポーツは我々にとってますます身近で楽しいものになってきている。しかし一方では、時代の流れの中でスポーツのとらえ、位置づけは複雑さを増しているように思われる。

私どもの世代の者にとっては、「スポーツ」と「文化」は異質のものである、というよりむしろ、両者は相対峙するもの、対角線上にあるものとして明快に分別されていた。しかし昨今、風向きが少し変わってきたようで、両者の垣根を取り外そうとする考えが広まってきている。わが国でも、競技スポーツは人類の創造的な「文化活動」の一つとして意味づけがなされ、「スポーツ文化」という言葉が用いられるようになってきた。いまや「文化はスポーツを包含する概念」として定着してきた。

それはそれで頷くのだが、世の中には、スポーツテレビゲームを「eスポーツ」と称してスポーツの枠組に入れよう、あわよくばオリンピック新種目にしようという動きもあると聞く。油断がならない。素早くボタンを押すことに命を懸けることがスポーツであり、文化と呼ばれる時代が来るというのであろうか。

さて、われらがスポーツのゴルフであるが、年老いた今にしてもなお、いかにボールを遠くに飛ばすか、その一事がすべてに優先する。1メートルでもみんなより前に出たい、そのためには分不相応なクラブを誂え、手当たり次第に指南書をあさる。藁にも縋るのである。解説者の『力を抜けば強い球が出る』はまことに魅惑に満ちた言葉である。芸術分野でもここぞというときには、人をひきつけ、かつ事の根源につながる魅力的な言葉がよく用いられる。指導者は、伝えきれない微妙な技術やタイミング、心の在り様を、「力を抜く」といった魔法の表現で、ひとの内に埋め込もうとするのであろうか。

とにかく白球が無事この谷を越えて、歓喜の中で対岸に立たねばならない。腕も折れよと渾身のクラブを振り切ってもなおお危うかった奈落の底が眼前にある。いらぬ力は抜かねばならぬ。しかし、体の力を抜けば、本当にボールは力強く飛んで軽々と谷を越えていくのであろうか。……構えには入ったもののボールをにらむばかりで動くことができない。

こうした悩み多いわれわれのゴルフもスポーツの範疇にかろうじて入れてもらうのであるが、しかし、鍛錬や練習なしの私どものゴルフを、薫り高い「文化」と呼ばれるのは、それはそれで少し困るという思いがある。

今年も函館文化会へのご支援・お力添えをお願い申し上げます。

一般社団法人 函館文化会 役員名簿

(平成30年5月24日選任)

○顧問	安島進	○理事	繪面和子	○理事	藤井方雄
	池見厚一		小笠原孝		藤井良江
○会長	金山正智		小原幸男		三浦稔
○副会長	平原康宏		櫻井健治		若山直
○常務理事	叶邦武		平昭世	○監事	向出清治
○理事	池上信廣		田村志朗		山田涼子

平成30年 神山茂奨励賞

～はこだて外国人居留地研究会 様に贈呈～

函館文化会では、平成30年「神山茂奨励賞」をはこだて居留地研究会様に贈呈しました。

贈呈式は、故神山茂氏のご命日にあたる平成30年11月7日五島軒本店で行われ、贈呈式後、同研究会会長 清水憲朔氏による受賞者記念講演、引き続き受賞者を囲んでの祝賀会が開催されました。

「神山茂奨励賞」を受賞されたはこだて居留地研究会様は、平成19年に郷土史に関心を持つ会員9名で設立され、幕末の箱館に点在した外国人居留地について資料の収集や調査、研究を進めながら、月一度の例会で各会員による研究発表を続けているほか、ガイドブック「はこだての外国人居留地マップ」をシリーズとしてこれまで10冊発行、関係機関・市民に無料で配布し研究の成果を還元しております。

贈呈式では、神山茂賞選考委員会の安東璋二委員長は選考経過の報告で「創立10周年を迎えた研究会は、真摯な活動を重ね、函館の歴史研究に着実に業績を積み重ねており、郷土の文化振興に貢献している」と評価するとともに、今後の活躍に期待を寄せておりました。

贈呈式の後、「箱館開港と異文化受容を考える」と題して同研究会会長の清水憲朔氏による記念講演が行われ、ペリーの来港で開港した箱館、その箱館が開港地となった経緯を振り返りながら、貿易相手国として箱館に来る外国商人の居住問題などについて解説されました。また、受賞者を囲んでの祝賀会は、祝賀ステージで箏曲美音和会主宰 宮崎加奈古氏による「雅び」などの演奏に始まり、お祝いのメッセージや出席された既受賞者の方々の紹介もあり、華やかな中にも和やかな雰囲気の中で盛会裡に行われました。

なお、同研究会会長 清水憲朔氏による記念講演の内容を、講演録で概要をご紹介します。



神山茂奨励賞を受賞した、はこだて外国人居留地研究会のみなさん

「神山茂奨励賞」受賞記念講演（平成30年11月7日）

函館開港と異文化受容について

はこだて外国人居留地研究会会長 清水 憲 朔



はこだて外国人居留地研究会会長 清水憲朔氏

この度の「神山茂奨励賞」受賞は私ども研究会にとりまして光栄の極みでございます。この賞を励みに、これからも歴史ある街函館の「土地の記憶と建物の物語」を掘り起こす活動を続けていきたいと決意を新たにしているところでございます。

さて、今回の「箱館開港と異文化受容について」というテーマは、昨年の神戸市で行われました外国人居留地研究会全国大会のテーマそのものです。全国の居留地研究会は11年の歴史を持っておりませんが、開港場の世界各国との交

流、居留地の歴史等の中に毎年テーマを定めてきました。一昨年は函館で「開港とフランス」というタイトルで全国大会を開催させていただき、各地の居留地研究会から積極的な参加がありました。フランスを通してカトリックの関わりを前面に出し、去年と今年の2年がかりで各研究会において「開港と異文化」「開港と女子教育・ミッションスクール」などをテーマに研究してまいりました。

ご覧いただいております居留地地図は、函館にあった外国人居留地を絵図化したものです。絵図化によって文字よりも強いインパクトが受けられるのではないのでしょうか。外国人居留地が函館にあったことや大町居留地という名前はよく出て来ますけれどもその実態についてはよく知られていません。この居留地地図は函館文化会様が出版された故富原章氏の「箱館から函館へ～古地図再現～」の明治9年図をもとに、明治11年内務省の命令で開拓使がおこなった実態調査の地所をあてはめて作成したものです。明治11年の時点で30件の地所で計26,869坪の居留地がありました。皆さんは「そんなにあったのか」とお思いになる事でしょうが、実はこの年より更に10年くらい遡る慶応3年には八幡神社の下に約一万坪のポルトガル領事館があり領事はイギリス商人が兼任しておりました。外国人居留地とは借地権と領事裁判権で保護された外国人のための居住地のことです。

なぜ箱館が開港場となり居留地ができたのか、そこからお話をしたいと思います。教科書には、ペリーによる開港、それからハリスによる通商開国の要求、この二つにより日本は開国されたとされております。ところが箱館を開港場として最初に挙げた国はアメリカではなくロシアです。ロシアは嘉永6年7月に長崎に来て同12月晦日に条約草案を幕府のロシア応接係に提出しました。その草案の開港場が箱館と大阪です。その後のロシア側の説明によると、ロシア領アラスカ（当時）から東アジアに下ってくる際の港として大坂が、また、ロシアの軍港があったカムチャツカから東アジアへ下ってくる場合に函館は都合が良いということでした。安政元年3月締結の日米和親条約ではご存じの通り下田と箱館がアメリカに開港されました。この二港はアメリカが具体的に名前を挙げて要求したものではありません。安政元年1月8日に長崎でロシアとの会談が終わったのですが条約は結ばれませんでした。ところが長崎のロシアとの会談の記録が江戸に送られ正月25日に老中に



明治9年地図を参考にした外国人居留地地図

届き、即日老中から当時浦賀でペリーと交渉していた幕府の委員たちに送られます。日本の開港はペリーとの交渉から始まったというのは、当時の幕府の対応をアメリカに限定した片手落ちの見方です。幕府は長崎で先行していたロシアとの条約交渉とペリーとの交渉を「合考」しアメリカの開港場に箱館を選び幕府から名を挙げたのです。アメリカが北太平洋の捕鯨船の補給基地として松前を要求したのに対し、先に長崎でロシアが望んでいた箱館をペリーに提案した訳です。続いて安政元年8月にイギリスとも条約が結ばれます。これは貿易のためではなくフランスと連合しロシアとクリミア戦争の最中であり、カムチャツカ半島にはペトロパブロフスク・カムチャツキーというロシアの軍港があったためです。函館を開港するにあたって当時の幕府は蝦夷地が世界各国との交通の要にある場所だと認識して箱館開港と蝦夷地の防衛と開拓を考えた事が史料から判ります。

安政年間に幕府は五カ国と12条約を結んでいます。安政元年12月に下田で日露通好条約をむすび、さらに安政2年から4年にかけて4つの条約を締結しています。これら4条約についてはあまり知られていませんが日本を通商開国に導いた重要な条約なのです。最初は長崎出島で二世紀以上続けられたオランダ貿易を明文化（条約化）した日蘭条約で安政2年12月の締結です。そもそも幕府はオランダの貿易慣行の明文化を避けていました。ところが8月に結ばれたこの日蘭条約の草案には出島の建物のオランダの所有権（借地権）が明記されていました。しかし幕府にとって町人が所有する出島の建物の一借家人としてきたオランダ人に借地権（建てた建物の所有権）を与えることは一番避けたいことです。米英露の和親条約国が日蘭条約の借地権を利益均霑（他国との有利な条約の自国への適用）により開港場に居住を要求することを恐れたのです。徳川幕府が家光の代に「鎖国」体制に入ったのは天草の乱の日本人キリ

シタンの抵抗の「忌まわしい記憶」によるものです。幕府は借地権による目に見える形の異文化であるキリシタンの「商館」の再現を是非避けたいと思っていました。ところがハリスは日蘭条約草案は条約調印までの間は借地権は有効であったとし下田・箱館の居住する米人に強引に利益均霑（適用）することを要求したのです。ここでは詳述する時間はありませんが、安政4年4月に箱館に上陸を開始したアメリカ貿易事務官ライスの取り扱いがハリスに借地権を認めるきっかけとなったのです。ハリスは同年閏5月に日米協約を締結し2条で翌5年6月からの米人の下田箱館の居留権（永代借地権と領事裁判権）を取り決めます。通商条約の取り決めの前に居住権を認め、一年後にアメリカ人が下田・箱館に居住を開始することが現実問題となったことが、以降、幕府を通商交渉に導いていったのです。

一昨年函館の居留地研究会全国大会にお呼びした東京大学名誉教授三谷博先生が30年前の論文で幕府が安政4年にオランダ、ロシアと自主的に結んだ二つの付録・追加条約を「これが最初の通商条約」とであるという解釈をしており、現在は教科書で通説となっています。事実以降幕府は安政5年にアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと「安政5カ国条約」を締結します。しかし通商を決める前に通商に必然的に伴う外国人の居住権を定めたハリスの日米協約が幕府を通商条約締結交渉に誘導したのです。日米協約締結後に幕府は急遽長崎で8月にオランダと、9月にロシアと通商条約を定め長崎に加え箱館を通商の開港場にします。その計画の完成図が亀田川河口の絵図です。幕府はこの蘭・露と二カ国通商条約を携えてハリスの出府、国書奉呈、日本の重大事件の開陳、11月3日の貿易開始宣言を経て12月アメリカと通商のための「新条約」交渉に入ります。幕府は公使の駐在と交易会所の貿易、そして下田の代替港に神奈川横浜を掲げ安政4年12月江戸蕃書調所でアメリカの総領事兼全権のハリスと通商条約交渉に入り、正月に仮締結をしています。幕府がハリスに交易会所の貿易から居留地貿易への転換を表明したのは12月16日です。



ウイルソン



ハウル



ポーター

上記の安政5年2月の亀田川河口のアメリカ人居留地と交易会所の図は、「はこだて外国人居留地研究会」が設立されるきっかけとなった絵図で、昭和3年12月に函館市立図書館が購入したものです。これは岡田健三先生の「函館百珍ト函館史実」に載っておりますが、この絵図は先程お話ししました3つの条約に基づいて計画された幕府の貿易構想を描いたものです。まず左に『百間×百間、1万坪のアメリカ人のための居留地』は、安政4年の日米協約より設定された日本最初の外国人居留地です。一方、交易会所は日蘭・日露条約の貿易の為のもので、左右45間と40間、横150間の台形の7千坪弱の敷地に交易会所をつくるという計画です。江戸の中止の指令は2月24日に箱館奉行に到来しています。

函館の外国人居留地は明治11年の時点で2万6千坪、ご存知のとおり今教会群となっているところで、ここは全部領事館施設のあった場所です。アメリカ領事館の予定地、ロシア領事館とロシア病院の建った場所、それからイギリス領事館があった場所、そういう所が今教会群となっています。それからもう少しまとまった地区としては、今のバイエリア…金森倉庫、ベイ函館、ラビスタなどこの地区も外国人居留地でした。「でした」というのは外国人居留地として2万1千坪指定されたのですが、慶応2年の世界恐慌で日本の開港場における貿易も世界経済の動きに巻き込まれ居留地に進出していた外国商人たちの支店、出先の多くが倒産し、英商ブラキストンやハウルのいた場所などが明治11年まで残った場所です。

次は先ほどの絵図にある船見町にハウル商会のイギリス人居留地で、己巳の役戦死者碑のある場所、海拔80m位の七面山から撮った写真と思われる。先日北海道新聞にはほぼ同じ写真が紹介され、船見町7番地で現在もあります。現在の所有者は相馬報恩会で、そしてここに映っている建物はおそらく明治10年頃（12年の大火でこの建物は焼失）に住んでいたのはウイルソンというハウル商会の商人です。そして右の建物は住居ではなく食べるための牛を飼ってい

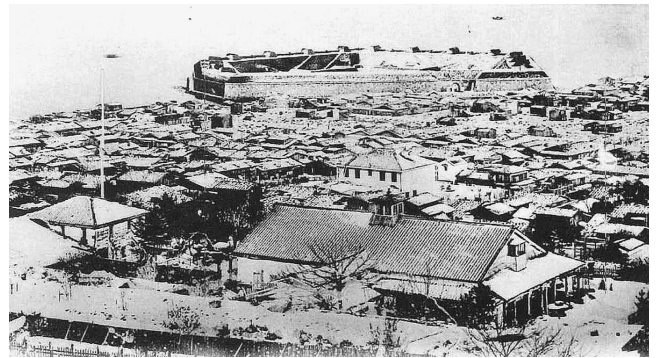
た牧舎です。その先にある建物がイギリス聖公会の宣教師デニングの司祭館です。奥の方に見えるのは弁天台場で、海拔80mというと山上大神宮の境内あたりです。ここにイギリス人のポーターという商人から始まり、安政6年から大正4年まで3代3名の英国商人が住んでいました。最初のデント商会の支配人ポーターはこの写真の建物の下の上新町の仮住居に住んでいましたがそこが火事になり箱館奉行に無断でその上の畑地として借りていた忠次郎の民有地に洋館の居宅を建てました。官有地の大町居留地以外で最初に外国人の住居が建てられた場所です。その民有地を後続のイギリス人商人たちが複数の民有地を借り増し約2千坪の面積に拡張し、それが当時の地形のまま現在も残っています。ポーターの次ぎにハウルが住んでいましたが、デント商会が1866年（慶応2）の世界経済恐慌で破産し、ハウルは独立します。そのハウル商会も明治6年の世界経済恐慌後にウイルソンに事業を譲渡し英国に戻ります。この写真はウイルソンがいた時のものです。慶応年間にデント商会のハウルは谷地頭にポルトガル領事館を置いていた時期があります。写真のウイルソンは大正4年に借地権を相馬報恩会に譲渡し鍛冶町バス通りのデンビー商会事務所で大正5年に亡くなっています。

ここでこのイギリス人商人たちと函館市民の関係がどのようなものだったのかをお話したいと思います。

最初に安政6年に来て元治元年まで函館にいたポーターという商人は、上新町の仮住居の隣にいた後家で家持のおあさという女性と結婚しています。そして子どもを三人もうけ、二人の男の子は成人して台湾で働いていたことがわかっています。娘は名前の中にハコダテとブラキストンを入れた長い名前がイギリスのワイト島で成人を迎え、その後結婚しオーストラリアに移住しています。

2人目のハウルという商人はデント商会の承認でかなりやり手でしたが、明治6年の恐慌で商売を止めてイギリスに戻っています。彼はイギリス人の妻を本国から連れてきて生活していましたが、二度の世界経済恐慌に人生を翻弄されました。

3人目の商人ウイルソンは外国人墓地に葬られていることからわかるように函館で一生を送りました。彼はハウル商会の会計管理の事務員として働いて生涯独身で過ごしています。彼が大正5年に亡くなったとき当時の函館日々新聞は付き合いのあった商人田中正右衛門の口述によるウイルソンの生涯を二日間にわたって掲載しております。それによるとかれは独身であり聖公会の非常に熱心な信者であったことが知られています。そして彼は廃娼運動に対し



七面山から見たウイルソンとデニング居宅

て積極的に応援しています。したがって彼は非常に紳士であり、尊敬されていたと言えると思います。私の父は明治40年生まれでウイルソンが死んだときは5歳くらいだったと思いますが、ハウル商会のウイルソンのことは良く聞いており非常に印象的な男だったと思います。彼が母国イギリスから取り寄せて庭に植えていたと思われるジギタリスが今でも突然花を咲かせています。

函館の人々とイギリス商人たちとの関係は商売ばかりでなくいろいろな面で関わりを持っておりました。大町にある有名な洋館の外観をもつ大正湯は外国人の住居を模倣して建てたと言われております。函館山中腹から写した田本研蔵撮影のパノラマ写真に明治12年の大火後に建てられたウイルソンの洋館があります。その洋館のデザインは大正湯と非常によく似ていて、大正湯はこのウイルソンの洋館を模して作られたのではないかと私は想像しています。

この土地自体は、最初は5人も6人も地権者がいた訳ですが、最後は遠藤吉平名義の土地になっています。そしてハウル商会の住宅、大町居留地の約半分を占めたハウル商会名義の借地権、建物、そして今の漁連の場所にあったハウル商会の倉庫のこれら三つはウイルソンが亡くなる一年前の大正4年にすべて相馬合名によって買われております。それによって先程地図で見た旧外国人居留地は船見町の外国人墓地4か所を除いて一切函館から消滅したということになります。ご静聴ありがとうございました。



箏曲美音和会主宰 宮崎加奈古氏による祝賀ステージ

平成30年度 函館文化会講演会

「函館は文化の十字路」を演題に開催されました

函館文化会では、平成30年10月13日(土)函館市中央図書館視聴覚ホールにおいて「函館文化会講演会」を開催いたしました。本講演会は、文化振興事業の一環として函館市中央図書館との共催で毎年行われているもので、この度は北海道教育大学名誉教授 佐々木 馨氏を講師に「函館は文化の十字路～様々な宗教の中で育まれてきた街～」と題し行われ、視聴覚ホールが満席となる150名の会員・市民に聴講いただき盛況裡に終了しました。

講演は函館における歴史の流れの中で、宗教の係わりがまちの形成に与えた影響について紹介、佐々木氏は、地域の「開拓」は仏教が寺院を置いて「開教（布教）」によって集落形成が進められてきたが、函館はハリストス正教会やカトリック教会、日本聖公会といった異文化の進出も加わった。

函館人の異文化を取り入れる寛容さから、自国文化とほどよい競争が生まれ、学校教育や医療福祉の充実につながり、これがインフラ整備などの原動力となった。また、函館には開港という「歴史力」、造船や漁業、大火を経験した防災技術などを創設した「都市力」、都市力を導いた「科学力」の3つの力があり、これらが多様な宗教を発展する歴史的背景となったと解説、さらに、現在の函館には「観光力」も加わり魅力のあるまちになっていると結び、聴取された皆さんは佐々木氏の話に引き込まれるように聞き入っている様子でした。

なお、今回の講演内容については、要約されたものになりますが講師の佐々木氏に纏めていただきました。今一度講演会当時を思い起こし、ご一読いただければと存じます。



平成30年講演会（平成30年10月13日）

函館は文化の十字路 ～様々な宗教の中で育まれてきた街～

北海道教育大学名誉教授 佐々木 馨

〈はじめに〉

現在の函館は、市民はもとより観光客にとっても「異国情緒」豊かな観光都市として広く愛されている。その中核はやはりキリスト教会群と領事館などに彩られたあの西部地区にあるでしょう。この歴史イメージはもちろん間違っていないかもしれませんが、そこに至るには幾多の歴史的遍歴があったのも事実。その辺の事情を紐解きながら、「函館は宗教の博物館」と評されるほどの文化的な宗教力は、どのような背景の中に獲得・形成されたのか。今しばらく、「函館は文化の十字路」の思索の旅にお伴ください。



講師の佐々木 馨氏

1 函館の歴史軸の推移

(1) 古代・中世の函館

～函館の夜明けは、[東部地域] から～

「ウソリケシ」と呼ばれていた頃の函館が逸早く歴史の夜明けを迎えたのは、「東部地域」であり、それは「みちのく文化」の延長としての黎明でした。7度目の挑戦にして初めて朗報を手にした世界文化遺産登録候補の「北海道・北東北の縄文遺跡群」こそ、「しょっぱい川」の津軽海峡が切り結ぶ青函交流の産物であり、縄文から擦文文化（8～13世紀）に至る連綿とした青函文化史の軌跡（『諏訪大明神絵詞』）だと思えます。

永享4年（1432）、南部氏との抗争に敗走した「蝦夷管領」「日ノ本將軍」下国安藤康季の渡道後に築造された「道南12館」の一つである「志海苔館」地域は、まさに「中世夷島」における先進的歴史ゾーンでありました。例えば、永享11年の紀年銘をもつ「脇沢山神」は「志海苔館」の館主の小林良景の守護神であり館神でもありました。小林氏と安藤氏との関係性からこの志海苔館は安藤氏の直営港湾基地であったと推測されます。

それだけではありません。安東氏が永享7年に若狭羽賀寺の再建に巨額の財を施入（『羽賀寺縁起』）している事実を徴すれば、昭和43年に発見されたあの40万余枚の「志海苔古銭」（のち国重要文化財指定）の埋納にもこの安藤氏が深く関与した可能性が想定されます。今後の「志海苔古銭の謎」を解明する重要な一つの鍵であろうと思えます。

「庭訓往来」で全国的に知られた宇賀昆布や貞治6年（1367）の板碑（近世の墓碑の前身）と戸井板碑の歴史絵巻には、このように「中世ウソリケシ」の原風景が垣間見られます。

「日ノ本將軍」安藤康季の後を継いだ潮瀧安藤政季が、康正2（1456）秋田・男鹿島に移住した後、後事を担ったのは周知のように蠣崎氏であります。この「上之国之守護」蠣崎氏による和人初の「蠣崎政権」が発足したのを契機に「中世夷島史」の歴史軸は、「ウソリケシ東部地域」から上ノ国・松前へと移ります。この政権下に、かの応仁の乱後における「文化の地方化」という大きな歴史のうねりを受け、中世的宗教移民ともいえる13か寺に及ぶ「中世夷島の寺院」（曹洞宗法源寺・法幢寺、浄土宗光善寺、浄土真宗専念寺、日蓮宗法華寺など）が松前地域に造立されます。北海道中世仏教史の夜明けです。

(2) 近世前期の函館 ～ [西部地域] の台頭の兆し～

この期の函館は、中世蠣崎氏を世襲した松前藩政のもと、行政的には「西在江差」とともに城下松前に属す「東在箱館」として、松前城下を中心にした「北前船文化」における「松前3港」の一角を担うことになります。この時期は、和人地としての「東在箱館」の定住人口の増加を背景に、「箱館西部地域」に松前の中世寺院による末寺建立が急速に進行します。例えば、法源寺末寺として1633年に高龍寺が、光善寺末寺として1644年に稱名寺が、専念寺末寺として1690年に浄玄寺（函館東本願寺函館別院の前身）が、法華寺末寺として1699年に実行寺が陸続と建立されます。このように、近世前期に至り、箱館の西部地域は松前城下寺院の「開拓と開教」による近世寺院の造営を通して、いよいよ函館史の中に台頭の兆しを見せ始めます。

(3) 近世後期の函館

～ [西部地域] が一躍歴史の表舞台へ～

この時期は、ロシアの南下策を受けて松前藩政から寛政11年（1799）前期幕府蝦夷直轄へと移行する時期であり、直轄の出先機関として箱館奉行所が元町に創設されると同時に、文化元年（1804）には有珠の浄土宗善光寺、様似の天台宗等澗院、厚岸の臨済宗国泰寺の所謂「蝦夷3官寺」が建立される時期です。ロシアの南下策の鎮静化により、幕府は文政4年（1821）に、蝦夷地を再び松前藩に返還するものの、例のペリーの浦賀来航を受けて蝦夷地の再直轄へと踏み出す。箱館港は安政2年（1855）、下田とともに「日米和親条約」に基づき「薪水・食料・欠乏品の補給」地として開港されることになる。安政元年のペリー箱館来航を機に、西部地域が一躍「歴史の表舞台」に躍り出ることになる。この機に乗じて、積年の布教進出の念願を果た



世界の宗教の集まる元町周辺

したのが他にもなく、堀川乗経による願乗寺（函館西本願寺の前身）の建立であった。これまで、松前藩政と松前専念寺および浄玄寺（函館東本願寺函館別院の前身）との独占的な布教体制の前に、門戸を固く閉ざされていた西本願寺派に空前の光明が差し込むこととなりました。ここに、西部地域の仏教文化力の充実はもとより、「北海道は真宗王国」の素地も固められました。

この時期は、箱館奉行所の亀田への移設とその防備を兼ねた五稜郭の築造に伴い、西部地域を核としながら、徐々に東部地域への拡張も顕著になる時期でした。

(4) 近代以後の函館 ～北海道の表玄関としての函館～

明治期に入るや、榎本武揚ら旧幕府脱走軍による五稜郭の占拠と維新政府軍との全面対決の箱館戦争を通して、函館の歴史の中心軸は西部地域を中心としながらも、東部地域にも移行を始める。近代の函館は、開港都市としての「都市化と国際化」の歴史を歩み始めることになります。

2 文化の十字路の歴史的背景

函館の西部地域に集約的に花開いた宗教的な文化力がそれ単独で形成されるわけでもありません。それを支える何らかの要因が存在したに違いありません。それは一体どのような要因ないし歴史背景をもとに形成されたのでしょうか。私は次の3つの力を指摘したいと思います。

1つ目は「グローバリズムとローカリズムの歴史力」

西部地域を歴史の表舞台に押し上げたのは、寛政11年(1799)と安政元年(1854)の2度にわたる蝦夷地直轄であり、その現地の出先機関として設置されたのが箱館奉行所でした。その防備を目的に7年の歳月をかけ、幕府の最後の威信を掲げて築城されたのが五稜郭であり、それが完成したのは元治元年(1864)のことでした。この五稜郭が奇しくも幕藩体制の総決算ともいべき戊辰戦争の終結地となったことも、幕末維新期の日本史の中に函館を登場させることとなりました。その意味で、幕府の蝦夷地直轄に起因する箱館奉行所の設置と五稜郭の築城および箱館戦争は、函館にとっては、日本国内における大きなローカリズムの歴史力となって機能したことは間違いありません。

また一方、安政元年(1854)のペリーの箱館来航と日米和親条約による箱館開港は、国内の多くの耳目を集めたこ



昭和9年 函館大火 十字街南部坂から丸井デパートを見る

とも紛れもない事実です。この事実は、箱館の歴史にとって、世界史的な大事件であり、まさしくグローバルな歴史力として機能したと考えられます。このローカリズムの歴史力とグローバリズムの歴史力の2つの「歴史力」は、どちらかと言えば、函館にとっては「外から他律的に付与」されたものでありました。

函館を幕末維新期の日本史上に押し上げ、同時に後述の宗教的な文化力を醸成した要因ないし歴史背景は、先の「歴史力」に比べれば、地場的にして自立的な「内側から醸成した都市力」ではないでしょうか。

2つ目の「北の魅力を生み出した都市力」

函館に近代的な都市力を逸早く導きだしたのは、のちの北洋漁業の草分けともなった高田屋嘉兵衛による択捉航路の開拓でしょう。それは幕府が蝦夷地を直轄化した寛政11年(1799)のことでした。函館はご承知のように、明治12年(1879)、明治40年(1907)、大正10年(1921)、昭和9年(1934)の4つの大火を余儀なくされた街でした。その悲惨な状況に一条の光明を与えてくれたのが「港湾工学の父」と評される廣井勇博士でした。博士は1896年、函館漁港船入間防波堤を建設する一方、防災都市計画に貢献されました。その流れの中に、1915年、日本最古の鉄筋コンクリート寺院としての東本願寺函館別院の誕生があります。

函館の近代として魅力を生み出しつつ経済力の向上にも大きな力を付与した幾つかの事業がありました。

1つ目は明治29年(1896)の函館財界の四天王と言われる今井市右衛門・平田右衛門・渡辺熊四郎・平塚時蔵による「函館ドック」の創業です。この事業は箱館戦争の遺構である辯天台場の解体によるものでした。

2つ目は明治40年（1907）の日露漁業協約に基づいて函館が北洋漁業の策源地としての地位を築いたことです。これは先の高田屋嘉兵衛による択捉航路の開拓の延長上にあることは言うまでもありません。

3つ目は明治41年の青函連絡船の就航であり、ここに函館が北海道における表玄関としての不動の地位を築いたことは、多言を要しません。函館は「函館ドック」「北洋漁業」「青函連絡船」の3点セットを兼備し、いよいよ近代都市としての「都市力」を蓄えていくこととなります。その都市力は、人口数の推移に顕著に反映されており、明治5年が25403人、同20年が46794人、同40年が88042人であったのが、大正3年（1914）に至り、なんと100751人を数えることとなります。これは東京以北最大の人口数であり、ここに近代都市函館の「都市力」を見ることができます。この都市力と連動して函館の「都市化」をなお一層推進した歴史背景は、「科学力」だと思います。

3つ目の「都市化を導いた科学力」

開港都市函館に「科学力」を導き出した先駆者は、五稜郭の設計考案者でも知られる武田斐三郎（1827～1880）であり、その象徴的事績は北海道最初の学問所である「箱館諸術調所」に集約されます。武田はここで蘭学・測量・航海術・造船・砲術・築城・化学などを伝授し、その門下生として郵便制度の創始者・前島密や鉄道制度の創始者・井上勝などを輩出したことは、人の良く知るところです。この武田とともに特筆すべき科学的貢献者は、初代駐日ロシア領事にしてロシア正教会の創建者としても広く知られているヨシフ・ゴシケビッチ（1858～1875）でしょう。ゴシケビッチは地域医療に貢献するとともにロシア語や写真技



ハリストス正教会 明治5年頃と現在

術なども伝授し箱館の科学力の発展に寄与しました。こうして醸成された箱館の科学的風土をなお一層推進する欧米人の参入もありました。1878年に市立函館博物館の開館に道筋を立てられた米国の動物学者のエドワード・モースと同年に函館の水道設計に尽力された英国人技師のヘンリー・パーマなどは、その代表例です。

3 文化の十字路の實相

日本の宗教的世界観を担ったのは、系譜的には、「神社神道の自文化」と「儒教・仏教・キリスト教などの異文化」ですが、とりわけ函館宗教界の場合、「自文化～神社神道・仏教・教派神道・新宗教」と「異文化～キリスト教」の2大構図として捉えて大過ないでしょう。また、函館の宗教的な文化力を考える時、その中核ともいべき〈内包〉としての機能は「開拓と開教」の領域に、その周縁ともいべき〈外延〉としての機能は「教育・医療・福祉」の領域に確認されます。次に、この宗教的な見取り図に従って函館宗教界の実相を眺めていきましょう。

(1) 異文化としてのキリスト教の〈内包〉

（北海道開拓と開教）

箱館におけるキリスト教開教の嚆矢は、1859年のフランスの宣教師メルメ・ド・カシヨンの「天主公会」であり、その2年後にロシア宣教師ニコライによる「ハリストス正教会」が創設される。1875年の弾圧事件である「洋教一件」では仙台出身士族が捕縛されましたが、1873年のキリスト教解禁以後は、徐々に教線を拡張し、日本人信者に聖歌合唱を指導するまでに市民の中に定着していきました。そして、1874年には英国人宣教師デニングによる「日本聖公会」の開教も始まり、1877年来箱ジョン・バチェラによるアイヌ民族への伝道が展開するなど箱館におけるキリスト教の「開拓と開教」はいよいよ本格化していきます。

箱館におけるこうした教線拡張は1880年代に入ると、全国レベルの開教へと発展していきます。1880年、神戸の「赤心社」は80名を伴い浦河町に入植し、その2年後には、京都・埼玉の「インマヌエル団体」が今金町に入る。

因みに、「インマヌエル」の語源はヘブライ語で「神われらとともにいます」の意であり、キリスト教による「開拓と開教」を象徴的に表現する団体名と言えましょう。1898年には、高知の〈北光社〉が600人を伴って野付牛に

入るが、その中には坂本龍馬の親族の坂本直寛も含まれるなど、北海道への「開拓と開教」は規模も拡張していきます。

(2) 異文化としてのキリスト教の〈外延〉

キリスト教の「開拓と開教」という〈内包〉の〈外延〉として、まず注目すべきは、「教育」でしょう。

[教育] 前述のハリストス正教会における箱館初の洋楽受容である聖歌合唱を皮切りに、日本聖公会のバチェラーが1882年にアイヌ学校を創設するなど教育界への進出は瞠目すべきであります。

例えば、1882年の遺愛学院、1889年の聖和学校、1886年の白百合学園、1960年の函館ラ・サール高校の創設などは、函館におけるキリスト教の外延としての教育貢献に他なりません。

[医療] 日本聖公会のバチェラーの後任として来箱したコルバンが新川病院の前身と医療設備を創設する一方、「福祉」分野の貢献も目を見張るものがあります。

[福祉] 函館の福祉界の先駆者は、熱心なクリスチャンとしても知られる佐藤在寛（1876～1956）であり、在寛は「大義滅私親」（人の行うべき大切なことは、己を捨てた社会奉仕、私利私欲を捨てた心構えにある）の信念のもと、1922年に私立函館盲啞院の第3代院長、1948年に北海道立函館盲学校および聾学校長を歴任するなど斯界の発展を領導されました。

(3) 自文化としての神道と仏教の〈内包〉（開拓と開教）

近代日本における自文化の首座を占めるのは神道であり、それは函館においても例外ではありません、神道と仏教は「体制宗教」として車の両輪の関係でした。

[神道と仏教の「開拓と開教」]

函館においても明治初年の神仏分離政策が断行されましたが、湯倉神社などでは若干の抵抗もあり、廃仏毀釈へとは至りませんでした。維新政府は神道と仏教による近代天皇制の宣布を目的に「三条の教憲」にもとづき全国に教導職を設置しました（明治5～12年）。東京に大教院、各県に中教院を1か所、寺院を小教院とする教導体制のもと、函館の中教院に選定されたのは願乗寺（西本願寺別院の前身）でした。その中教院を核に浄玄寺・高龍寺・神明社でかなり活発な説教が行われました。ま

さに、「体制宗教」による「開拓と開教」の展開です。

[仏教の「開拓と開教」]

既述した文化元年に和人役人と出稼ぎ人の先祖供養およびキリスト教の防遏を目的に建立された蝦夷3官寺は、文字通り、蝦夷地の仏教による「開拓と開教」である。この仏教の「開拓と開教」の論理は、安政4年の松前城下寺院においても、「庵室」造立は村落形成となり開発に通じると共有されていた。その象徴的な典型例は、明治25年に「移民ヲシテ護国ノ精神ヲ発揚振起」するのは仏教であると説いた『北海道宗教殖民論』であろう。

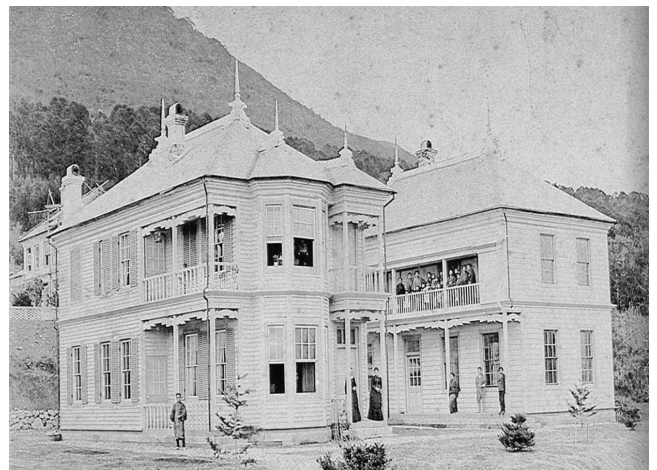
[教派神道と新宗教の「開拓と開教」]

「体制宗教」の一翼を担った「教派神道13派」のうち、神宮教が1875年、大成教が1887年、金光教が1891年、天理教が1893年、御岳教が1896年に函館に伝道布教を開始している。少し遅れて、新宗教の創価学会が1953年に、立正佼成会が1964年に布教開始するなど函館はまさに「宗教の博物館」の様相を呈する。

(4) 自文化としての仏教の〈外延〉

[教育] 函館仏教会の外延として、各種の学校が創建された。1885年の高龍寺・稱名寺・実行寺・常住寺・東西真宗函館別院による女子教育を目的にした「六和女学校」、1889年の高龍寺吉祥女学校、1891年の函館大谷女学校がそれである。1908年に開始した高龍禅学会も仏教の市民に開かれた外延的な活動であろう（以上は拙著『北海道仏教史の研究』、北大出版会による）

[医療] 箱館戦争の折、将軍奥詰医師として榎本脱走軍



明治17年頃 遺愛学院（場所：元町）

に加わった高松凌雲が箱館病院の分院の高龍寺において敵味方を超越した「赤十字精神」の傷病兵治療と1900年の函館厚生院の開設に尽力した高龍寺住職・上田大法の貢献も仏教の外延として注目される。

[社会事業・領事館の補助事業] 1871年の東本願寺函館別院による「本願寺道路」(虻田～定山溪)の開削や寺院による次の領事館的事業も広義の外延であろう。1857年の浄玄寺(東本願寺別院の前身、米国ライス)、1858年の実行寺(ロシア領事ゴシケビッチ)、1859年の稱名寺(英国領事ホジソン)、1860年の高龍寺(ロシア領事団の仮宿所)。

〈結びにかえて〉

- ① 函館は幕末維新时期～大正期を中心に、「歴史力」と「都市力」および「科学力」を背景にして「宗教的文化力」を醸成した開港都市であった。
- ② その「宗教的文化力」は〈内包〉として「開拓と開教」、〈外延〉として「教育・医療・福祉・社会事業・領事館の補助事業」を兼備する二重構造を有する稀有な近代都市であった。
- ③ 以上の教訓を踏まえて、今後の函館は「歴史力・都市力・科学力・文化力」に「観光力」を加えた5つをキーワードに発展されるよう切望してやみません。

令和元年「函館文化会講演会」を開催します

～ 演題は「最後の箱館奉行 すぎうら ひょうごのかみまこと 杉浦兵庫頭誠」～

今年度も函館市中央図書館との共催で「函館文化会講演会」を次のとおり開催いたします。今回は元市立函館博物館長田原良信氏を講師にお招きして「最後の箱館奉行 杉浦兵庫頭誠」と題しての講演です。

幕臣杉浦兵庫頭誠は慶応2年(1866)、箱館奉行に任命されて日本の北門である蝦夷地当時の責任者として開港場箱館に赴任、諸外国との対応、蝦夷地・箱館の警備強化に努め政治改革も進め、慶応4年(1868)には最後の箱館奉行として明治新政府へ箱館・蝦夷地を引き渡した。また、箱館戦争終結後の明治2年(1869)明治政府開拓使の函館支庁の責任者として返り咲き、函館の統治に尽力した。

このような経歴を持つ杉浦兵庫頭誠は、目付から奉行時代を通して、膨大でかつ詳細な日記を綴っている。日記に記された箱館奉行時代の150年前の箱館の出来事を通じて、最後の箱館奉行 杉浦兵庫頭誠の人柄や功績を読み解き解説をしていただきます。

会員皆さんはもとより、市民の方々にもお声がけをいただき、多数聴講くださいますようお願いいたします。

- **開催日時** 令和元年10月12日(土)
午後1時30分開演(午後1時開場)
終了予定 午後3時30分
- **会場** 函館市中央図書館 視聴覚ホール
(函館市五稜郭町26-1)
※事前の申し込みは不要です。直接会場にお越し下さい。
なお、中央図書館、保健センター駐車場を利用できますが、混雑することが予想されますので、公共交通機関でのご来館にご協力下さい。
- **演題** 「最後の箱館奉行 杉浦兵庫頭誠」
～「箱館奉行日記」から150年前の箱館を読み解く～
- **講師** 元市立函館博物館長
田原良信氏

函館文化会講演会 函館市中央図書館郷土の歴史講座

最後の箱館奉行

すぎうら ひょうごのかみまこと
杉浦兵庫頭誠

講師 田原良信氏
(元市立函館博物館長)

五稜郭内の箱館奉行所庁舎...1868(慶応4)年撮影

箱館奉行 杉浦兵庫頭誠

日時 令和元年10月12日(土)
午後1時30分～3時30分(午後1時開場)

会場 函館市中央図書館 視聴覚ホール(函館市五稜郭町26番1号)

定員 150名 入場無料(事前の申し込み不要です。直接会場へお越し下さい)

その他 中央図書館、保健センター駐車場を利用できますが、混雑合うことが予想されるので、公共交通機関での来館にご協力下さい。

共催 一般社団法人函館文化会 函館市高丘町5丁目1号 TEL 57-1175
函館市中央図書館 函館市五稜郭町26番1号 TEL 35-5500
(協賛:函館市・TFC 函館ホール)

函館文化会 市民公開講座

函館文化会では、郷土の歴史・文化などを学び、探究しながら、受け継がれてきた「郷土の歴史・文化」を後世に継承することを目的に「市民公開講座」を開講しております。

今年は、3月と8月に2回の「市民公開講座」を開催しましたが、それぞれテーマに相応しい場所として函館競馬場様、湯倉神社様のご協力を得て会場にしたこともあり、いずれも想定した人数を超える会員・市民の方に参加をいただき、講座をお願いした講師の興味深い話しに受講された皆さんから好評を博しておりました。(講座の様子は表紙と38ページに写真を掲載しました。)

なお、2回の市民公開講座の内容について、講演録で概要をまとめましたのでご紹介します。

第6回市民公開講座 (平成31年3月20日)・JRA函館競馬場

近代競馬の誕生と函館競馬場

JRA競馬博物館学芸員 秋永和彦



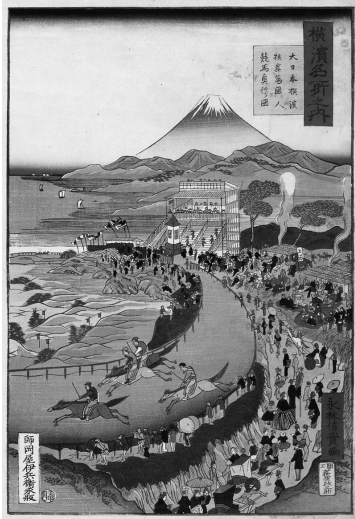
JRA競馬博物館学芸員の秋永と申します。まずは私が所属しておりますJRA競馬博物館について説明させていただきます。競馬博物館は日本中央競馬会が1991年(平成3年)に開設したものです。私の所属は公益財団法人馬事文化財団で、当財団は1977年(昭和52)に開館した横浜の根岸にある「馬の博物館」という施設を運営し、馬に関する歴史、文化、美術などを紹介しておりました。そこから派生する形でJRA競馬博物館ができました。

さて本題の「近代競馬の誕生」です。そもそも近代競馬が始まったのが何時かと申しますと、15世紀から16世紀頃、イギリスの貴族たちが自分たちの持っている馬を競わせたというのが元々の始まりです。次第に参加する馬の頭数が増え、お金を出し合った賞金を勝った人が総取りする等の色々なルールや競馬を運営するための組織等の形が出来てきて近代競馬が誕生することになります。

また、競走馬はほとんどがサラブレッドという品種になりますが、この品種もイギリスで出来上がったものです。イギリスが十字軍の遠征で西アジアあるいは中央アジアに行った時にその地域の馬を連れ帰って、イギリスにいた馬と掛け合わせて作ったのがサラブレッドです。こんなところからもイギリスが競馬の母国と言われています。これが日本に入って来たのが江戸時代の終わりのことで、鎖国体制が崩壊して開国した日本にたくさんの外国人がやって来ます。その際に自分たちの国でやっていた競馬を日本でも楽しみたいということで始めたのが、日本における近代競馬の始まりということになります。ですから、初期の頃はここ函館(箱館)、横浜、神戸といった開港場で競馬が行われた記録が残っています。

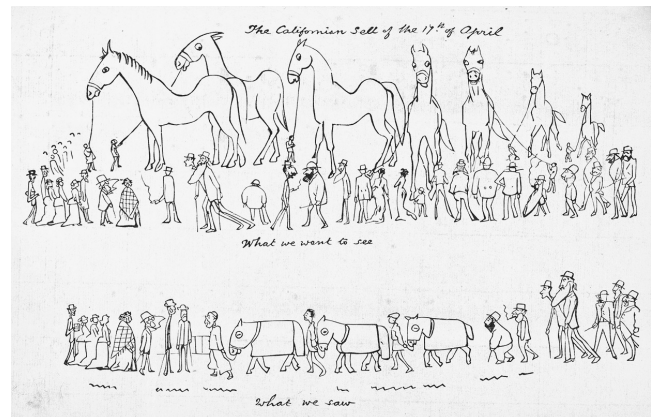
次は外国人居留地と競馬についてお話しします。外国人居留地というのは、日本にいる外国人が生活する場所のことです。これは横浜の話ですが、1864年(元治元年)江戸幕府は当時横浜に滞在していたアメリカ、イギリス、フランス、オランダの各外国人公使たちと「横浜居留地覚書」という書類(契約書)を交わします。その第1条がなんと競馬場についての取り決めでした。どれだけ競馬が好きなんだと感ずるところです。その内容は、居留地の近くにあった沼地を幕府が埋め立てて運動場兼競馬場として外国人に貸出すというものでしたが、生麦事件をきっかけに東海道から離れた丘の上の根岸に競馬場が作られました。これが

日本で最初の本格的洋式競馬場である横浜・根岸競馬場です。現在は、ここに馬事文化財団の「馬の博物館」があります。神戸は生田神社の近くにある土地を造成し競馬場を作りました。このような形で開港場において競馬が行われてきたという歴史があります。こうした横浜や神戸の競馬場では日本にやってきた外国人が外国人のルールで競馬をやっていたのですが、これに対してやがて日本人も競馬を始めるようになります。1870年（明治3年）靖国神社で競馬が行われましたが、これは政府の兵部省（今の防衛省）が行った競馬で日本人が主催して行った最初の近代競馬です。もう一つ有名な競馬場が上野の不忍池にもあり、ちょうど池を一回りするコースの競馬です。ここは1884年（明治17年）から10年間ほど行われた競馬場になりますが、明治天皇が行幸観戦された浮世絵が多く残っています。



横浜名所之内 大日本横浜根岸万国競馬興行ノ図
永林信実 明治5年（1872）馬の博物館蔵

当時の競走馬は、人間と比べても非常に小さかったです。それは、この頃はまだサラブレッドなどという大きな馬はほとんど日本にいなかったため、いわゆる日本在来馬と言われる非常に小柄な馬が主流でした。特に南部馬という今は絶滅してしまった品種ですが、そういった小さな馬がこの頃は競走馬の中心でした。『ジャパン・パンチ』という風刺雑誌に、馬のセリ市の様子が描かれ、外国人はサラブレッドのような大きな馬をイメージしていたけれどもあまりに小さな馬しかいなかったということ、「私たちが見たかったもの」「私たちが見たもの」と2枚の絵で風刺的に書かれています、これが当時の馬の実情だったといえます。



ジャパン・パンチ
1877年（明治10）4月号 馬の博物館蔵

他に特徴として馬券の発売は基本的に禁止されておりました。当時、賭博は御法度でしたが唯一例外として認められていたのは外国人が運営していた根岸競馬場で、いわゆる治外法権だったのです。日本の法律が行き届かないということで例外的に認められておりました。一方、上野不忍池の競馬などはすごく賑わっていましたが、馬券が売れないということで経営が成り立たなくなって根岸の競馬場以外は明治20年代から30年代に姿を消してしまいました。それではなぜ競馬が復活したかということ、きっかけになったのは日清・日露戦争です。両戦争とも日本軍は大陸を戦場としたわけですが、当時の陸軍の中心は戦車ではなく騎兵隊でした。日本軍は先ほどの話にあったように小さい馬に乗っていましたが、清やロシアは大陸と地続きということで非常に大きな馬に乗っていたのです。日清・日露戦争は日本が勝利しましたが、あまりに馬の能力が違いすぎることに気づかされ、これはまずいあということで政府は1905年（明治38年）馬政計画を立てました。これは当然お金がかかることになり、そのお金をどうするかとなったときに「馬のことだから馬からとれば」ということで1906年（明治39年）頃から馬券の発売を認めます。以上、明治時代の競馬の話をお届けしてお話ししました。

ここからは函館競馬に移りたいと思います。私のお話をする前に函館競馬場が120周年を迎えたときに映像を作成しておりますのでご覧ください。（パドックビジョンで映像を10分ほど放映）

函館の競馬の始まりは1875年（明治8年）、蓬莱町（現在の宝来町）にあった招魂社（現在の函館護国神社）の祭典競馬です。勿論馬券は売られていませんでしたが、ひい

きの馬を応援しながら競馬を楽しんだそうです。その後、海岸町に競馬場は移りましたが、1896年（明治29年）に柏野（現在の駒場町）に新しく柏野競馬場（現在の函館競馬場）が完成しました。この競馬場は、現在、日本中央競馬会が持つ10ヵ所の競馬場の中でもっとも古く、歴史のある競馬場ということになります。他では、札幌競馬場は1907年（明治40年）、福島競馬場が1918年（大正7年）の開設で、余談ですが地方競馬では兵庫県の園田競馬場が1932年（昭和7年）です。このように、函館競馬場は歴史のある競馬場であるというがおわかりいただけたと思いますが、その他に函館競馬場ならではの特徴をいくつか紹介したいと思います。

まず、競馬場内にある馬の温泉療養施設です。元々は1962年（昭和37年）に湯の川の大湯温泉に競走馬療養所があって、競馬場から引き馬で馬を連れて行き温泉に入れて戻ってきていました。ところが車の増加によりとても湯の川まで馬を引いて連れて行くのは大変だということで競馬場の中に温泉の療養所を設置したもので、競馬場の中に温泉があるのは函館競馬場だけです。JRAには競走馬総合研究所が福島県いわき市、いわゆるハワイアンセンターのある場所にあり、研究所には温泉がありますが、競馬場の中にあるのは函館競馬場だけです。

また、競走馬の診療所についてです。レース中にいろいろな故障が発生しますから診療所自体は各競馬場にありますが、函館競馬場の診療所はより専門的な手術ができるという点が特徴です。他にはどこにあるのかと言いますと、関東、関西に一つずつ、東は茨城県の美浦村、西は滋賀県栗東市のトレーニングセンターで、トレセンとは広大な敷地の中で競走馬の調教に専念する場所です。このトレセンの中に専門的な治療施設がありますが、競馬場の中にあるのはこの函館競馬場のみということになります。地方では2011年（平成23年）に東京の大井競馬場にもできましたが、中央競馬ではここ函館競馬場のみです。

函館競馬場のもう一つの役割ですが、競馬場でありながら夏はレース前の調教も行います。夏に函館とか札幌で競馬をやる時、暑い中わざわざ茨城県とか滋賀県のトレセンから馬を連れてくるのは大変なので、涼しい北海道の競馬場に夏の間滞在させて北海道でのレースを走らせることが多いのですが、そのときの調教施設として競馬場が使われ

ます。函館で競馬をするときは札幌で調教し、札幌で競馬をするときは函館で調教する訳です。2014年（平成26年）ゴールドシップという馬が札幌記念というレースに出るために函館競馬場に滞在していた時、朝5時に競馬場を開放してその調教を見るために650人ほどのお客さんが足を運んでくれました。ゴールドシップが札幌記念を走った後にフランスの凱旋門賞に出る予定だったので、すごく注目を集めた時でした。

次に「競馬場前停留場」です。函館市電は開通が1897年（明治30年）で、そのときは馬車鉄道でした。それが1913年（大正2年）に電化され函館市電になったのですが、この「競馬場前停留場」は1898年（明治31年）にできています。今では全国の競馬場の近くに「△△競馬場」という名前の付く駅がたくさんありますが、一番古いのは函館の「競馬場前」だったということになります。手前味噌になりますが、実はJRAでは毎年JRA馬事文化賞という賞がありまして、去年その馬事文化賞を受賞した『競馬と鉄道』という本があります。その中にも函館競馬場と競馬場前停留場の話がありますので興味のある方がおりましたら、昨年発売されたばかりですので入手もそう難しいと思いますので、是非読んでみていただければと思います。

次は、函館競馬場に関わった方々をご紹介しますと思います。

まずエドウィン・ダンですが、1848年生まれのアメリカ人で、いわゆるお雇い外国人として来日します。そして1875年（明治8年）に七重農業試験場に来ています。札幌の真駒内にある種畜場、今はエドウィン・ダン記念館になっていますがそこにもいました。牧羊による畜産と酪農に非常に功績のあった人ですが、実は競馬にも大きな功績を残しています。この人が日本に持ち込んだ技術の一つが馬の去勢です。ヨーロッパでは既に一般的になっていました。馬を落ち着かせるという意味もありますが、先天的に気性の荒い馬を去勢することにより、そのような遺伝子を持つ馬を残さないことが海外では主流でした。それに対して日本ではむしろ気性の荒い馬を乗りこなしてこそ一人前だという考え方があって、なかなか広まらなかったのですが、函館大経らが理解を示したことから次第に去勢の文化が広まっていくようになったのです。また、1878年（明治11年）

北海道大学の近くの北海道育種場に一周800mの競馬場を作ります。そこでエドウィン・ダンは近代競馬を定期的に行い、この競馬場には明治天皇も足を運んだという記録が残っています。その後一度アメリカへ帰国しますが公使として再来日し、そのまま日本で活躍し1931年（昭和6年）東京で86才の生涯を閉じます。

次に紹介するのが、時任為基です。1842年（天保13年）鹿児島県生まれ薩摩藩出身。1872年（明治5年）に開拓使になり、1877年（明治10年）函館に来ます。そして1883年（明治16年）には私財を投げ打って海岸町に競馬場を作り競馬を開催しています。函館競馬場から少し離れたところに時任為基が作った時任牧場があり、その名前をとった時任町という町名が現在も残っております。



函館大経肖像画 馬の博物館蔵

次は、函館大経です。1847年（弘化3年）様似町生まれ。もともとは函館大経という名ではなく、生まれたときは斉藤義三郎という名前で、幼いときからすごく乗馬が達者だったといわれております。江戸時代の終わり頃、江戸に出て小野家の養子となり、幕府の騎兵隊に入り明治になってからは西洋式の馬術を習いさらに磨きをかけます。1870年（明治3年）靖国神社、招魂社の競馬で優勝し、大慶至極と声をかけられ褒められ、声をかけたのが明治天皇という話もあります。そのときの大慶と出身の函館を併せて函館大経と改名したといわれています。1872年（明治5年）七飯牧場で働いていたときにエドウィン・ダンと知り合い馬術や馬の文化や技術を教えてもらい、また時任為基が海岸町に開いた北海共同競馬会社の筆頭発起人になるなど函館の競馬界の発展に大きく貢献した人物です。この函館大経の門下生・弟子・孫弟子というような函館競馬の一門の方々

がJRA・競馬界において活躍しています。函館大経の孫にあたる函館孫作は、第一回日本ダービーに優勝した騎手で、そのお孫さんの函館一昭は船橋競馬場で調教師をやっています。このように函館大経の門下生の中からたくさんの優秀な騎手、調教師が出ています。

次に紹介するのが、園田実徳と武彦七で、名前は違いますが実の兄弟です。園田実徳は1840年（天保11年）鹿児島で生まれ幕末の鳥羽伏見の戦いや西南戦争の際は政府軍として参加し、その後は北海道運輸会社を興し、函館根室間の航路の開設や鉄道の開設、路面電車の開設など実業家として力を発揮しました。園田実徳も時任為基や函館大経と同じく海岸町での北海道競馬会社による競馬開催に関わっています。また、今の天皇賞の前身に当たる「帝室御賞典競走」に優勝した馬の馬主としても知られています。

武彦七は、病弱や西南戦争で戦死のため跡継ぎが居なくなった武家に園田家から養子に入ります。実徳とともに北海道に渡り、エドウィン・ダンや函館大経がいた七重農業試験場で働くことになり彼らから馬術を習い、馬術家として騎手として非常に能力があったということで、「武彦七は手綱を使わなくても絹糸一本あれば馬を動かせる」という言い伝えがあります。園田実徳は園田牧場を開き、今は団地や園田通りとして名が残っていますが、その牧場の経営を兄に代わって彦七が引き継いでいました。武家と競馬と聞くと顔かれる方がいらっしゃると思いますが、武豊騎手、弟の幸四郎調教師のお父さんの武邦彦さんはターフの魔術師と呼ばれたほどの騎手でしたが、園田牧場で生まれていますから函館出身なんですよ。

それでは、これで本日の講座を修了させていただきます。ご静聴、どうもありがとうございました。



講座修了後、ウイナーズサークルでサラブレッドと触れあう

湯の川温泉いまむかし

元湯川町1丁目町会長 村山信夫



ただいま「湯川生まれの、湯川育ち、自称“湯川の原住民”」と紹介されました。私は、子どもの頃は遊んでばかりいたものですから、郷土の歴史は体験的に知っているつもりですが、系統的に調査や研究をしてきたわけでもないので、今回は“原住民”の話として聞いていただければと思っています。

「湯の川温泉」のあらまし

皆さんご承知の通り、湯の川温泉は函館の南部に位置し、津軽海峡に面し温泉街を三つの河川、松倉川、鮫川、湯の川が貫流しており、北海道三大温泉（登別、定山溪）の一つと言われています。JR函館駅から6km、函館空港より3kmと近く電車・バスによるアクセスも優れています。かつては約60施設の旅館や寮があったのですが、今は大型ホテルを中心として湯の川温泉旅館組合加盟が20施設、年間利用客数135万人が訪れます。

いにしへの「湯川村」の様子

松浦武四郎の「蝦夷日誌」には当時の箱館～湯川村への道のりについてつぎのように述べています。

「箱館を出て下湯川村まで二つの道がある。一つは地蔵町より浜に出て大盛、高盛を通る海岸道路である。もう一つは亀田村を歩いていく道で、これが本道であるが少し廻り道と思われる。野道を経て下湯川村まで亀田から十八丁、箱館より一里半と言われている。人家は二十軒（略）宿屋も一軒。この村人もほとんど浜に昆布漁に出て長崎納めの昆布を採っていた（略）。村内には畑もあり少し小高い森の中に明神社（湯倉神社）があり小川の湾曲している所に立て札が立っている温泉があり、桶を埋めてその中に湧出させている。昔は

この温泉は熱かったが川普請の時そばの石を掘って湯壺を大きくしてからはぬるくなったと言っていた。しかし効能ははなはだ良いと聞いた（略）」とあります。

湯川村の成り立ち

人が住み始める 湯川という地名はアイヌ語でユベツ（温泉の川）からつけられ、後からきた和人がこれを湯川として用いたのが始まりとされている。もともとは青森下北半島の人たちが来て春からここで漁業に従事し、秋には地元に戻るということを繰り返していました。宝暦7年（1757）「蝦夷松前聞書」によると箱館には65戸、（湯川村20戸）とあり、天明5年（1785）になると下湯川村50戸200人と「蝦夷拾遺」にはあります。

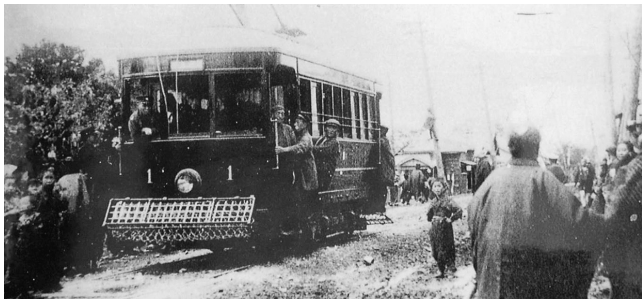
文久3年（1863）神社の脇に住む和泉仁左衛門が温泉宿を始め、明治に入ると禄を失った士族救済のため岩橋轍輔が下湯川村寺野（現在の日吉町）に近代的農業会社「開進社」を創設、約76町歩の土地で洋式農業を開始した。

石川藤助が温泉を掘り当てる 明治元年、旧幕府軍が五稜郭を占領箱館戦争が行われましたが、総裁の榎本武揚はたびたび湯川を訪れ、旧幕府軍の療養所を作りました。この時「地中120、130尺も掘れば今（当時38℃）より熱い湯が出るであろう」と言い。これを聞いた和泉仁左衛門が後年石川藤助に話すと、井戸掘りを本職とする石川は明治18年（1885）掘削機を使って掘削を開始。翌年ようやく50℃以上の温泉を掘り当てました。これを契機に湯の川温泉は全国的に注目の的となり、当時の県令時任為基は「温泉は函館に必要」とし温泉場の設立を認めます。林長館や金森別荘において掘削、浴場が作られました。明治24年までの5年間に19カ所の湯元と8軒の旅館、料理屋が建ち並び温泉街へと発展しました。

渡辺熊四郎による黒松防風林の植林 明治初期にて金森洋物店を開き函館の四天王の一人と言われる渡辺熊四郎は砂浜地帯で強風のたびに難儀していた住民のため私財を投じ、静岡の沼津から黒松の苗木20万株を取り寄せ苦勞の末植林を成功させた。当時57000㎡に20万本植えられたが現在は14000㎡に900本あまりとなり湯川黒松林としてその名をとどめ、林の入り口には「植えおきし我は冥土にかえるとも千代まで栄える松のみどりを」の歌碑が建てられている。

函館・湯川間のアクセス

馬車鉄道の開通 豊富な温泉が湧出し、明治20年、函館～湯川間に8間幅の新道が開通。湯川は旅館や料理屋も増えましたが、函館とのアクセスが十分ではありませんでした。人力車はありましたが値段が高く庶民向きとはいえず、その上当時の道路は長雨になると泥が膝までくる始末でした。明治26年(1873)佐藤祐知が函館の有力者の協力を得て「亀函馬車鉄道」を設立、明治30年12月、東川町～弁天間(3.2km)を開通させ、翌明治31年社名を「函館馬車鉄道」に変えて12月12日湯川村までの線路を開通しました。東川町～湯川間の所用時間は約40分でした。このことにより一時停滞していた湯の川温泉への遊楽客も増え賑わいが戻りました。



湯川線の電車運転開始のにぎわい(大正2年)

路面電車の開通 馬車鉄道は一定の効果をもたらしたものの、冬期間の積雪による運休、馬の飼育管理費の高騰、日露戦争による馬の徴発などデメリットも発生し、電車への切り替えが急務となりました。そこで明治44年「函館馬車鉄道」を吸収合併した「函館水電(株)」が整備を進め、大正2年6月、東雲～湯川間に電車が開通しました。この開業は東北北海道で一番早く、温泉街も馬車鉄道時代より一層便利になったことで新しい旅館も続々と増え発展しました。

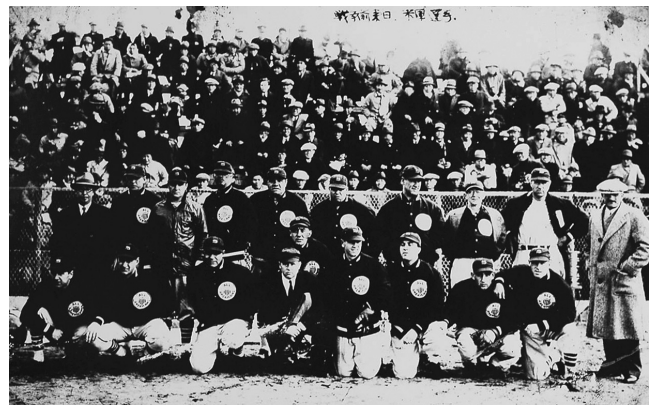
活気あふれる湯の川温泉

大正時代湯の川温泉は北日本一の遊楽地と言われ、その中心街が銀座通でした。商店はもとより、見番、タクシー会社、書店、銀行、映画館等が並び賑わいました。また「電車開通記念・湯の川温泉宝さがし大会」が開催され、明治32年(1899)軍により函館山が要塞化、立ち入り禁止となつて麓に下ろされていた「三十三観音を湯川に遷座」することになり、大正3年(1914)それを迎えるときは数千人の人出で湯川中がおおいに賑わったそうです。

今はホテル、旅館が海岸を中心に立ち並んでおりますが当時は松倉川を挟んで両側に多く建てられていました。湯の川温泉に明治から昭和にかけて逗留した著名人は幸田露伴、斎藤茂吉、志賀直哉、芥川龍之介、長谷川伸、高橋掬

太郎、司馬遼太郎、ヘレン・ケラーがいます。また現在の竹葉新葉亭の所には大正4年開業で3階建て50室の「湯の川ホテル」があり、そこには通称千人風呂と言う大浴場がありました。また、明治45年根崎では漁具販売を営んでいた吉川太郎吉が近くの海で温泉が噴き出しているのをヒントに苦心して温泉掘削に成功すると、大正2年以降続々と旅館が立ち並び、根崎温泉街が形成されました。なんと言っても当時一番大きかったのは大滝温泉で、千人風呂に対して万人風呂と呼ばれ家族風呂、蒸し風呂、余興場も供えていました。外風呂はプールとして私もよく泳ぎましたが、夏休みになると鮫川電停から列を成してたくさん子どもたちが泳ぎに来ておりました。

冬になっても凍らず年中釣りを楽しむことができる「湯の池」という釣り堀があり、この池の鯉は旅館、料亭に提供されていました。また函館文化会の第6回市民講座で取り上げられた日本で最も古いと言われている「函館競馬場」は海の見える競馬場として明治29年(1896)の開設です。大正9年(1920)岩見永次郎氏が現在の函館アリーナ付近に娯楽施設「新世界」を作りました。鮫川をはさむ約2万坪に演芸館、竜宮城などが併設され、大正14年には大正衛生博覧会も行われています。昭和9年3月21日の函館大火の復興を願い函館大洋クラブ(オーシャンクラブ)は大火



昭和9年、日米選抜野球大会でのアメリカ軍(ペーブルース、ゲーリックの顔もある)

後の復興をかねて函館での日米選抜野球大会の実現に向けて奔走実現しました。この2回目(1回目は昭和6年)となる日米選抜野球はペーブルースが加わることで人気は上昇、昭和9年11月8日4500人収容の湯川球場は満席となりました。ゴルフ場は競馬場内に北海道初のゴルフ場が6ホールありましたが、大正9年岩船家別荘「香雪園」ができると、昭和11年隣接する9万2千坪に北海道一といわれた9ホールのゴルフ場が完成しました。また、北海道初の林間学校が湯川の渡辺孝平別荘において開催された。ドイツ留学から帰った齊藤与一郎氏がその必要を説いて大正10年(1921)8月3

週間にわたり実施、近くの松倉川で泳いだ子もいた。

北日本製紙工場は大正7年(1918)創業の製紙会社で主に機械式和紙、ちり紙を製造されていた。その後、社名を変更して河川の汚染問題や大手企業の市場進出などがあり昭和47年(1972)北海製紙(ホクシー)函館工場は閉鎖されましたが、54年間の操業で約200名余の地域雇用があり地元からも親しまれていました。

湯倉神社の起源としては後で宮司さんからお話があると思いますが、松前藩九世5代藩主高広が幼少の頃重い皮膚病に罹り、母の清涼院が夢枕で神託を受けたので、湯の川温泉をさがしあて、小屋を建て療養したところ全快しそのお礼として承応3年(1654)砂金で作った薬師如来像と鰐口を奉納したのがその起源と言われています。

古くから湯川の住民にとって鎮守の神様、温泉の神様として崇められ、毎年9月の例大祭では神輿渡御・奴行列が行われ、昭和29年(1954)300年祭、平成16年(2004)350年祭が盛大に行われました。前述されたさまざまな歴史の中心にあり、湯川住民の心のよりどころとして大切に守られております。

忘れられない災害

函館は大火の多いところで有名ですが湯川も例外ではなく昭和29年(1954)5月12日午前1時頃出火、銀座通りの家屋50戸が焼失するという大火に見舞われました。400名の方々が湯の川小学校に避難しました。幸い死傷者はいませんでした但其の影響は大きく以後銀座通りの賑わいは失われました。また、昭和40年(1965)9月4日には道南地方を襲った集中豪雨により湯の沢川、湯の川の上流から一気に流れ出した洪水により神社の下辺りはボートで避難を余儀なくされる事態となりました。死者1名、負傷者8名、湯川地域全体で浸水家屋5800戸、被災者は22000人にのぼり、災害救助法の適用となるほどの大きな災害でした。この濁流の中で若者三人の好リレーで幼い子ども二人とその母親を救ったという美談もありました。

湯の川を取り巻く環境

大正13年、温泉濫掘の結果温泉が枯渇傾向を見せ、300カ所の泉源が30カ所となり廃業する業者が続出します。湯川村村会は藤原覚因村長を先頭に反対派を説得、温泉の村営化を成し遂げました。また温泉湧出以来旅館の開業などともなう人口増に対し、従来の井戸水だけでは生活用水の不足をきたしその解決を迫られ、近くの川より飲料水を引いたりしましたがいずれも失敗、この水道問題は函館市との合併の大きな要因となっていきます。

函館市との合併については、湯川村側としては〈上水道の施設〉を最大の要望とし、函館市側は〈温泉を市営化して観光産業に役立てること〉をかかげ昭和14年(1939)4月1日湯川町(昭和11年6月湯川村から湯川町になっていた)と函館市の合併が施行されました。当時の函館日日新聞(昭和14年4月1日)は『地域の飛躍13倍、競馬場、ゴルフ場、スキー場など含んで飛躍的に拡大、大函館の巨歩を印すこととなった。函館市の人口は湯川町10021人を加えて230884人となり、全国13位から長崎市を抜いて12位となった。』と報じています。また、合併により市域は湯の川温泉から西は深掘、東は川汲峠の下、北は三森山の麓という広大な面積となりました。昭和40年代以降、大型スーパー、ホテルが進出し多くの小売店や個人旅館は廃業を余儀なくされ大きく様変わりしています。

今後の湯の川温泉の発展と課題

この問題についてはいろいろご意見があると思いますが、私見を述べさせていただければ大切なのは「湯川だけが良ければ良い」と言うのではなく、函館観光をどう発展させるかという視点を忘れてはならないと思っています。函館の観光を湯の川温泉エリアの他、西部エリア、五稜郭エリアそして南茅部エリアとどう連携していくかを考えることが大事だと思っています。観光の発展といっても観光地に金を落とせば何をしてもよいということではありません。間違っても今話題のカジノを持って来るなど考えてはなりません。湯川地区は函館大学はじめ国立工業高等専門学校、ラサール高校、その他小、中、高校がいくつかあります。いわば文教地区でもあります。こうした若者を含め、観光を文化としてどう高めて行くかがこれからの課題ではないでしょうか。みなさんにも是非関心を深めてもらいたいと思います。

以上湯の川温泉には栄枯盛衰の歴史はありますが、これ乗り越えてきたのは地域住民の郷土愛でありそれを支えたのは本日の講座の会場となった「湯倉神社」というシンボルがあったからだと思っています。

以上、予定の時間をオーバーしてしまい、拙い話を最後までご静聴いただきありがとうございました。

次回の市民公開講座は3月を予定

第8回市民公開講座は、「路面電車」をテーマに3月中旬に開講を予定しております。

開講日時、講座の内容、講師等決定次第改めて会員皆様にお知らせいたします。ご期待下さい。

「卓話」 ～総会終了後に開催しています～

函館文化会では、毎総会後に「卓話」を開催しております。この「卓話」は、総会に集まって議案の審議を終えそれで解散も如何なものか、この機会を活用して著名な方々の話を聞きながら、より会員の絆を深めようと始められたもので、その「卓話」も今回で16回目を数えました。

今回は、北海道教育大学非常勤講師で元函館文学館館長の藤井良江氏に「伝えていきたい“昔の遊び”」と題して、藤井氏が小学校教諭時代に新たな教科となった生活科で、地域の高齢者の協力を得て昔の遊びを取り入れた活動を紹介、終了後には昔の遊び道具を手懐かしいひとときを過ごすこともできました。

なお、卓話でのお話しのポイントを藤井氏に纏めていただきましたので、ご紹介します。



昔の遊び道具を手にする出席者のみなさん

第16回卓話（令和元年5月28日）

伝えていきたい“昔の遊び”

北海道教育大学非常勤講師 藤井良江

本日は、“昔の遊び”についてお話しさせていただきます。少しの時間おつきあいいただければ幸いに存じます。

私はプロフィールにもありますように、定年まで学校の教員を務めておりました。函館市立八幡小学校に勤めていた平成3年のことで、翌年の平成4年から小学校に新しい教科「生活科」が誕生するということになりました。全く新しい教科でその狙いは、教師主導でなく子どもたちの「思いや願い」を大切に、結果よりも課題に迫るその過程を大切にすること、教室で机に座り黒板に向かって学ぶだけでなく、床に座って思い思いに対象に向かってもよく、学びの場は、教室だけでなく広く地域にも出かけて地域の中で子どもを育てる。そして、指導者も教師だけ

でなく地域の素晴らしい人材の方々も先生になっていただくということでした。教科目標のキーワードは「具体的な活動や体験を通して」「自立の基礎を養う」。そして、その趣旨は、「具体的な活動や体験を通すこと」「身近な生活にかかわる見方や考え方を生かすこと」「自立し、生活を豊かにしていくこと」とされていまして、教科書と黒板だけでは成り立たないことがわかります。具体的にどんな活動があるかといいますと、「学校生活」「学校探検や地域探検」「飼育・栽培」「四季を通した自然とのふれあい」「自分の成長」「作って遊ぼう」等です。実際に活動した写真がありますので、ご覧ください。



講師の藤井良江氏

このように「生活科」は、たいへん楽しく子どもたちが生き生きと活動できる教科ですが、今日は、その中の“昔の遊び”に取り組んだ実践についてご紹介いたします。この活動の実現に当たり、地域の高齢者の方々を学校にお呼びし指導していただけないものかと思案しました。何せ、前例がありません。私はまず、地域の町会老人クラブの会長さん宅にお伺いしました。でも簡単なことではないことがわかりました。会長さんからこんなお話があったのです。「会員の皆さんは、みんな忙しいんだよ。旅行やお孫さんの運動会や参観日に行くし、お祭りなど地域の行事、旦那さんの介護などそれぞれ予定が入っているんだよ。そうだ

ねえ、だいたい2ヶ月位前に言ってもらわないとねえ。第一、学校に来て先生をやってくれと言われても、学校って我々にとっては敷居が高いんだよねえ」と困惑する会長さんに、「そこをなんとか」とお願いしたら、「それで、何を教えてほしいの?」「お手玉とかあやとり、メンコ、コマ、それからけん玉もお願いしたいです」「ん?けん玉?何それ?」「丸い木の球に紐がついていて、それをお皿に入れる…」「ああ、日月ボールだね。今売っているかねえ。しばらく見ていないなあ。カン馬なら自分で作れるよ。それから千尺って知ってるか?あれもいいよ」等のやりとりがあって、いよいよ道具の用意です。私にとって全くわからないものもありましたが、教えて頂きながら準備を進めます。まず、生地を買ってきてお手玉を30個作りました。次に、竹店で竹を買ってきて子どもたちと一緒にサンドペーパーで磨いて初めて千尺を作りました。それから、サバ缶を買って食べたあとそれに紐を付けカン馬を作り、けん玉はあちこち探してやっとおもちゃ屋で見つけました。竹馬は作るのが難しく学校で5組買ってもらいました。そういう慣れない準備をして道具をそろえていきました。そこで学んだことがたくさんあるのです。例えばお手玉。民芸品屋さんにあるような縮緬の綺麗で可愛い布で作ったら、見た目は可愛いのですが使ってまもなく布がほつれてきて中の小豆がぼろぼろ出てくるんです。「地味な柄でも布団の皮が丈夫でいいんだよ」と教わりました。さらには、いい響きになるように小さい鈴を入れてみたのですが、「それより、こはぜがよい」と教えられたり。このように経験して始めてわかることがたくさんありました。

こうしてようやく、会長さんのお声がけで老人クラブの方々十数人に集まっていた会館に道具をそろえて持って行ったのですが、そこにまたまた難問が。皆さんに「昔やったといっても、60年も70年も前のことだから忘れてしまったよ」と言われてしまったのです。会長さんが「まあまあそ

う言わないで、練習してみようよ」と言ってくださって、その後会館に3回集まって練習して下さったそうです。

こうしてやっと当日を迎えました。お迎えする子どもたちは、自分たちで話し合っ、①感謝の気持ちをきちんと言葉で名人さんに伝えよう、②耳が遠い方もいらっしやるので大きな声でゆっくり話そう、③おじいちゃんとかおばあちゃんではなく名前で呼ぼう、などの約束を決めました。そのようにして実現した記念すべき第1回目の「名人さんに教えていただく“昔の遊び”集会」の様子の画像がこれです。(写真①)緊張の中に自信と言いますか、誇らしげなご様子が伝わってきます。(写真②)集会は、予想を遙かに超える盛り上がりで、子どもたちはもちろん、名人さんたちも本当に楽しく嬉しそうな様子で、授業が終わってご退場の時には、握手、握手でなかなか退場できない状況でした。子どもたちも自然に、おじいちゃんおばあちゃんに寄り添って手を取ったり話しかけたり笑顔いっぱいに接していました。これまで、道德などの時間に「お年寄りの方々は、足腰が弱ってきて速く歩けない」「耳が遠い方もいる」等のことを教えられてきたので、子どもたちは「自分たちが守ってあげなければ」「優しくしなければ」と考えていましたが、実際お会いしてそういう面もありながら、「お年寄りの方々はすごい」「何でも知っている」「とっても優しくかった」「あったかかった」「地域の人たちと触れ合うことはこんなに素敵なんだ」と、今までの「お年寄り観」が大きく覆る嬉しい体験になりました。私たち教師も目から鱗で、地域人材の底力、生身の人間の教育力のすごさを実感しました。この実践が基になって函館市内の“昔の遊び”の授業の形ができていきました。もちろん、函館だけでなく、日本全国で地域の方々に教わる“昔の遊び”が展開されていきました。私もその後赴任した学校で必ず“昔の遊び”を生活科で行えるように道具をそろえました。そうした生活科で初めて行われた地域人材の学校における登用は、その後に新設された「総合的な学習」や他の教科



写真①



写真②

領域にも広がり、今では小学校ばかりではなく中学校や高校でも普通のこととして行われています。

さて、生活科誕生から20数年が経ち、現在“昔の遊び”の扱いはどうなっているのでしょうか。当初の熱い思いや熱気は、残念ながら少し冷めている感は否めませんが、生活科の学習としてしっかり残している学校が少なくありません。私の近所の学校では、別枠で「昔の遊び集会」として地域の方々をたくさん呼び出して2時間交流をするというような取り組みを行っています。また、函館市内では冬場の室内遊びとして常時けん玉やお手玉などを教室においていたり、児童館や学童クラブなどで取り組んでいる例も多いです。

せっかく教材化した“昔の遊び”を途絶えさせないでなんとか次世代につなげていけないだろうかと考えていたところ、平成15年から北海道教育大学函館校で「生活指導法」の講義を受け持つことになりました。チャンスと思い、“昔の遊び”の活動をシラバスに正式に組み入れました。函館校に入学してくる学生は日本全国から集まってくるので、あやとりやメンコなど共通のものもありますが、各地域独特な遊びがあったりしてそれを聞き取るのも楽しいものです。はじめ、20歳前後の大人である学生がちゃんと遊んでくれるだろうか、やったことがない学生はなじめるだろうかという懸念もありましたが、なんと大盛り上がりで、時間が足りないと言われるくらい時間いっぱい楽しんでいました。

「“昔の遊び”をしてみてどんな感想を抱いたか。将来自分が子どもたちに教えること想定して書いてください」という課題に対して学生たちは、

- ① いつでもどこでも誰とでも遊べる手軽さがいい。
- ② 一つの道具で工夫次第で何通りもの遊び方があるのがいい。
- ③ ゲームのようにお金を出して買うのではなく、身近にある材料から作る遊びが多く、お金がかからない。

作るところから遊びが始まる。

- ④ 教えたり教えられたり、褒めたり褒めてもらったり…言葉が常にその中にある。コミュニケーション能力を育てるのにとってもよい教材だと思う。
- ⑤ 異年齢交流に最適な道具である。等々。
- ⑥ 普段目立たない友達がけん玉の名人だったりコマがうまかったりして吃驚した。実際の授業でも、友達の意外な面が出て見直し認め合う場面になるのでよい。

という感想も多く出され、あの頃“昔の遊び”の活動を通して、子どもたちが自分自身への気付きや自己肯定感が高まっていくのを何度も目の当たりにしたのを思い出しました。

さて、学校教育はまた新たな学習指導要領の基で展開されていますが、その中で基になる3つの柱として、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力、人間力等が示されましたが、これらは生活科が目指してきたもの、子どもたちに培っていききたい大切なものにつながっているように思えてなりません。

ところで、令和の時代、現代の子どもたちは普段どんな遊びをしているのでしょうか。函館市内の小学校で調査をしていただいたものがありますのでご覧ください。(写真③④) 学校での遊びと放課後の遊びです。このような状況の中で、先ほどもお話しさせていただきましたように“昔の遊び”は、これからの子どもたちの育成に大切な要素をたくさん含んでいて教材としてたいへん優れていると考えますので、是非、残しておきたい日本の伝統であると思っています。

私は、現在大学で学生に教えていますが、もう少ししたら今度は、地域のお年寄りの一人として、小学校の放課後子ども教室などで伝えていく道もあるかなと思っています。本日は、私の拙いお話を最後までお聞きくださりましてありがとうございました。

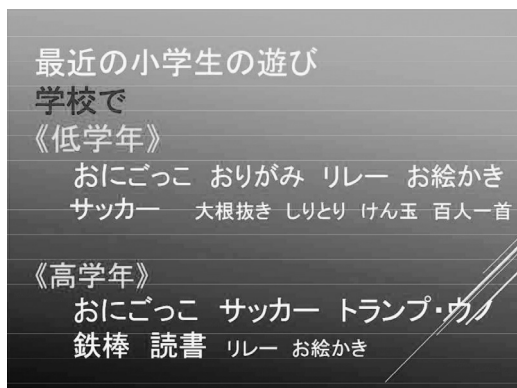


写真 ③

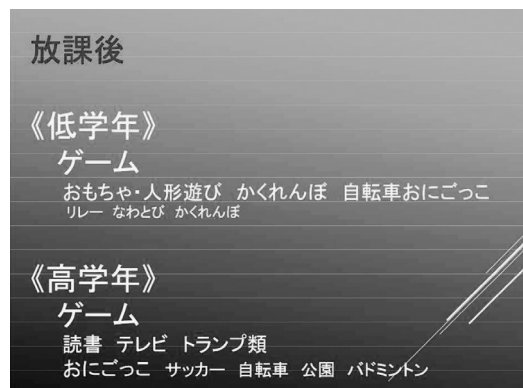


写真 ④

特集 函館の歴史と文化を語り継ぐ ④

～ テーマ「五稜郭界限」～

函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化」の伝承に因み、毎年発行する会報に函館の歴史・文化のテーマを取りあげ、会員の皆さんにそのテーマに沿った思いやエピソードなどを綴っていただき後世に残していきたいと、特集「函館の歴史・文化を語り継ぐ」を継続して取り組んでおります。

第4回目は「五稜郭界限」をテーマに取りあげました。静かな佇まいの住宅街を形成していた「五稜郭周辺」も、今は函館の繁華街としての賑わいを見せている「五稜郭界限」、今はあの佇まいを探すのにも苦労しますが、そんな「五稜郭界限」にまつわる思い出を6人の会員から投稿いただきましたので、ご紹介いたします。

なお、次号（第82号）第5回のテーマは「市電」の愛称で親しまれている“路面電車”としました。通勤や通学、買い物などに利用した“路面電車”にまつわる皆さんの思い出・エピソードをお寄せください。応募の要領等は、35ページに掲載しております。



五稜郭電停付近

五稜郭地区の移り変わり

中野 豊



五稜郭地区が商業地区として大きく変化をした昭和40～60年代を年表的に紹介いたします。

昭和39年12月1日、五稜郭築造100年を記念し五稜郭内に武田斐三郎顕彰碑の除幕式が市内関係者により執り行われ、この日に五稜郭タワーもオープン。

昭和44年8月、新都心開発協議会（現在の新都心五稜郭協議会）が発足、この年の10月、丸井今井デパートが末広町から本町に移転してきました。

昭和45年5月、箱館戦争終結101年を記念して、「第1回箱館五稜郭祭」が新都心五稜郭協議会により開催、協議会初代会長の小柳忠三氏、専務理事の鈴木清司氏、そして多くの会員の方々の協力により実現しました。市民が立ち上げたこの祭は、函館の歴史祭として、現在もその役割を果たしています。この年11月、ハイショップホリタが丸井今井デパートの向いにオープンし、北海道新聞函館支社が五

稜郭町に社屋が完成、移転してきました。また、五稜郭公園入り口前にあった函館商業高校が亀田地区に移転したのもこの年です。

昭和46年、新都心五稜郭協議会の会長に堀田純一氏を選出、箱館五稜郭祭実行委員長も堀田氏就任。この年の五稜郭祭は5月2日、3日の両日、行啓通では初めて歩行者天国が実現しました。

昭和49年4月、函館中央署が五稜郭町に完成。

昭和50年11月、五稜郭商店街振興組合が結成され、各街区に分かれていた組織が一つにまとまりました。

昭和51年6月、私が五稜郭タワーに勤めることになり、この時より五稜郭の店主の皆様にお世話になることになりました。

当時、五稜郭地区の皆様は大変元気で地域を挙げてイベント、特に箱館五稜郭祭を函館の祭として定着させることに特に力を入れておりました。五稜郭タワーに勤めるよう

になって直ぐに祭の手伝に参加し、地元商店主の方々の参加意識の高さには驚かされたものです。電気屋さん、糸屋さん、畳屋さん、履物屋さん、小間物屋さん、布団屋さん、おもちゃ屋さん等々、それぞれに個性的で楽しい人たちでした。

昭和55年、美原地区に長崎屋（8月）、イトーヨーカ堂（9月）が開店。

昭和56年3月には梁川地区に函館西武デパートが開店し、流通業界は大門地区、五稜郭地区、美原地区と三極化で現在に至っています。

昭和61年9月、道立函館美術館が函館商業高校の跡地にオープン。

昭和63年3月、青函トンネルが開業し、青函連絡船は終業となりました。

その後、行啓通りの拡幅により街区の整備は進みましたが、箱館五稜郭祭の中心メンバーであった電気屋さん、糸屋さん、畳屋さん、履物屋さん、小間物屋さん、布団屋さん、おもちゃ屋さんは次々と店仕舞い、街はシャッターの下りた店が多くなり残念でなりません。しかし、商店主の皆さんが立上げ残してくれた箱館五稜郭祭は函館の歴史



箱館五稜郭祭（昭和56年5月）

を紹介する祭としてこれからも多くの市民により受け継がれ、道南一円に新しい形でその歴史を伝えるため新しい展望も開けて来ており、五稜郭地区の発展に期待をしているところであります。



なかの ゆたか 昭和10年東京都小平市生まれ。東京都農業試験場講習所終了後、花木生産に携わる。昭和51年五稜郭タワーに勤務、その後、取締役、専務取締役、代表取締役を歴任し、現在代表取締役会長。五稜郭商工親和会会長、箱館五稜郭祭実行委員会委員長など務めている。



行啓通り遙か

小 熊 庸 介

母校、函館市立柏野小学校で創立80周年記念の公開授業があった。

招かれて参観した後、その5年1組の教室で、子供たちに先輩として昔の話をする機会を与えられた。2008（平成20）年11月のことである。卒業以来58年、子供たちとはちょうど60歳違いであった。

柏野小学校の自分の在学期間は1944年4月～1950年3月、昭和19年から25年までである。戦争が終わってすぐで食べる物も着る物も乏しく、だれもが貧しかった頃のことを中心に話をした。

当時のわが家は、五稜郭公園前電停のやや東寄りを左折した小路の左手二軒目だった。電車通りの真向かいに消防署（函館市第六消防所、一時期は消防本部）があって、背

後に火の見櫓が高く聳えていた。その右隣には、今年で営業を終えた本町市場が建ったばかりだった。

電車通りには木造二階建ての店舗が軒を連ねていた。こちら側に向かって右から炭屋、餅屋、質屋、毛皮屋、糸屋、パン屋と続き、わが家の小路を挟んで左に靴鞆屋、氷屋、骨董商、煎餅屋、自転車屋、砂糖屋、製靴店、染物屋、豆腐屋、茶舗、床屋、その先の行啓通りの角（シエスタハコダテの位置）は大きな薬局だった。線路は行啓通りを越えて続き、亀田町・ガス会社前から五稜郭駅前まで市電が走っていた。

毛皮屋というのは、犬の毛皮を加工して手袋やチョッキを作る店だった。その頃、犬殺しというおじさんがいた。太い針金の輪を手にして野良犬を追い詰め、巧みに捕らえるところを路地裏で目撃したことがある。戦時中、砂糖屋に砂糖はなくなり、パン屋では戦地から店主が復員しても

しばらくはわずかな菓子類だけを扱っていた。

わが家は、その頃よく見られた、建って間もない一棟二軒の造りの借家の南側だった。電車通りのすぐ裏だったにもかかわらず家の前と後ろに狭いながらも庭地があって、表に柵の木、裏にはこぶしの木が立っていた。いずれも平屋の屋根をぐんと超える大木だった。近くには、ほかにも大きな柳や朴の木、かえで、松、山桜、栗の木などが立っていた。桑の木もあった。その若葉を摘んで蚕を飼った。

栗の木は小路の突き当りの内科小児科医院の広い敷地であって、秋にたわわに実ると、同い年の友達と二人でその庭に忍び込んだ。縁側の雨戸が固く閉まっていた大丈夫と思ったのだが、どういう訳かいつも必ずそれがガラリと開いて、ちょび髭の先生に大声で怒鳴られた。彼は柏野小学校の校医で、家でも掛かりつけだった。学校の健康診断の時に、二人はいつも先生の前で小さくなっていた。

わが家の前の狭い小路が、近所の子供たちの大勢集まる遊び場だった。缶蹴りなどさまざまの鬼ごっこに始まって、ビー玉、独楽回し、パッチ（「めんこ」というのが全国的らしい）、釘刺し、陣取りなど。女の子はゴザを敷いてままごと、石けり、まりつき、縄跳び、ゴム跳びなど。男の子たちの遊びは、大きくなるとゴムまりのゴロベース、更に角材を削った手製のバットを振る三角ベースへと進化した。

スケートで 来る人もあり 登校道

当時の自作だが季語もちゃんとあって、一応は俳句である。謄写版刷りの文集に残って歳月を経れば、これはもう郷土の歴史的な証言である。めばしい金属が皆供出させられた頃が遠くで鉄製品が出回り、子供たちの世界にスケートが登場した。五稜郭公園の堀に氷が張るとそこでスケートに興ずる人々がいたが、そんな本格的なものではない。ゴム長靴にズック製のバンドでくくり付けた雪用のスケートである。これが大流行で大勢が電車通りを滑って回った。当時は積雪が多かった気がするが、消防署の前以外は除雪していなかった。

電車道でスケートをするなどということは、現代の小学校5年生の想像の範囲から遥かにかけ離れているものようだった。

歩いて15分くらいの五稜郭公園には友達とよく出かけた。堀で釣りをするためである。規制はなかった。狙うのは鮒だが、エサがみみずなのでゴタッペ（と称するウキゴリ属

のハゼ）がよく釣れた。水槽で飼っても鮒は長持ちするが、ゴタッペはすぐ腹を見せて浮き上がった。大人も堀端に来ていて、長い釣り竿で深みの鯉を狙ったり、中には身欠き鯉を入れた御用籠を沈めて川エビを掬っている人もいた。

陽の当たる堀の石垣に並んで腰掛けて素足をぶらぶらさせながら釣り糸を垂らすかつての子供らの姿は、聴いている今の子供たちのイメージにどうやら浮かび上がらせることはできそうだった。

家から小路一本を挟んで西側が、幅の広い行啓通りだった。1922（大正11）年7月、摂政宮（後の昭和天皇）の五稜郭視察を記念してその名が付いたのだという。

行啓通りの先の北海道新聞社のあたりには史跡館という円形の建物があった。そこで公園と逆の左手の細い道に入ればしばらく行き、土手を下ると「すっぽんかっぽん」に出た。当時は大きく蛇行していた亀田川をそこで堰き止め、非常用水の取り入れ口にしていた。夏には子供たちが泳ぎ、魚捕りをした。堰の下の水量の減ったあたりには、やつめどじょう（と呼んでいたスナヤツメ）やカジカ、ザリガニなどがいた。その後、流れは直線に改修され、川下に白鳥橋が架けられた。この水音の響きを思わせる奇妙な呼び名の由来は定かでない。

冬になると、行啓通りで大勢が橇滑りをした。電停から五稜郭公園に向かって最初の信号のあるあたりが下りになっている。子供たちはこれをハトヤの坂と呼んでいた。右側に鳩屋という駄菓子屋があり、向かいには銭湯と床屋が並んでいた。今より傾斜がきつかった気がする。子供たちは、手製の平たい橇に勢いをつけて飛び乗り、滑り降りた。学校からの注意は、荷馬車や馬橇の後ろにぶら下らないよ



昭和30年頃の五稜郭電停付近、奥が行啓通り
（北海道写真史料保存会発行「ふるさと回想写真集」より）

うにということだけだった。日暮れまでみんなで心ゆくまで滑った。

五稜郭界限は、今では酒飲みなど大人の楽園になってしまったが、昔は子供たちの楽園だったのである。



子ども時代を過ごした五稜郭

向出悦子

私が五稜郭に引っ越したのは、小学校3年生の時でした。それまでは、基坂を登ったところでは

“元町公園”となっている父の勤める役所の官舎に住んで居ました。毎日海を眺め、裏山に登り、木の実を食べたり・木に登ったり、海水浴や釣りにも歩いて行き、花火大会は目の高さで観る事もでき、冬になると基坂をソリで滑り降り、春には函館公園に咲く桜のお花見と、楽しい事だらけでした。

ところが、五稜郭に越して来てからは、眺める海も、登る木もなく、海水浴も花火も、電車に乗って行かなければならなくなり、子どもだった私にとってはつまらない町にしか思えず、がっかりしたものでした。それでも官舎の裏手に流れている川（亀田川）を発見！、土手を下りて川の中に入り、石をひっくり返したり、木の枝でダムを作ったりと、暗くなるまで遊んでいました。母は病弱で、近くの医院に薬をもらいに行くのですが、医院に行くには離れた所にある橋を渡り、田家町を通って行かなければなりません。医院は川を挟んだ向かいに見える所にあるというのに。早く遊びたい私は、川を渡って行きます。ところが、一度川で転んでしまい、袋が濡れ川を渡った事がバレてしまい、こっぴどく叱られました。が、当然その次も、私は川を渡って薬をもらいに行きました。今では、立派な橋と広い道路ができていて、そこを通る度にこの事を思い出します。（白鳥町から警察署前まで）

五稜郭公園まで歩いて3分、朝早く兄と掘へ釣りに。バケツで堀の水をすくったら、魚がいっぱい入っていて、釣り糸を垂れている兄に白い目で見られてしまいました。

◆
おぐま ようすけ 昭和12年函館市生まれ。函館市と八雲町で小中学校教諭の後、日高、胆振教育局、函館市教育委員会に勤務。平成10年函館市の小学校校長定年退職。

昭和29年には公園で北洋博覧会があり、家族で行きました。ものすごい人の数に、迷子にならないかと心配する親を尻目に、回る鉄棒で遊んでいるうちに手を離れたのか、吹っ飛んでしまい、脳震盪を起こし知らない人に助けってもらった事もありました。現在復元された箱館奉行所があるあたりは当時広場で、どこかの会社の運動会が行われていて、大人達が真剣に走っているのをいつまでも笑って見ていました。

また、夏休みには公園で“林間学校”が開かれます。「体の弱い子ども」が条件でしたが、私はまんまと参加。松林の下で昼寝をしていると、小鳥の声が聞こえ、元町では毎日聴いていたのに、それがこんなにも気持ち良いなんて思った事もなかったと、子どもながらも深く感じ入って、ぐっすりと眠りました。

元町の時に通った弥生小学校は、鉄筋コンクリートのがっしりした校舎でしたが、転校した千代田小学校は新しく小さな可愛らしい校舎に興奮しました。しかし、学校の前には火葬場があり、時々、授業中に煙と臭いが入って来て、先生を始めみんなで大急ぎで窓を閉めたのも、サプライズのように楽しい思い出です。火葬場が何で、また、あの臭いが何なのかという事など、まるで知りませんでした。（ひょっとしたら、私だけかも？）今は公園になっています。

今はもうありませんが、私が通う千代田町の中央中学校迄は、およそ1キロ。普段は“行啓通り”を通りますが、遅刻しそうになると近道を行きます。時々、馬が路をふさいでいて「蹴られて死ぬかも！」と、必死で通り抜けました。当時は、まだ馬車が走っていて、馬糞が風に乗って舞い上がっていました。

この行啓通りに、月に2回“夜店”が開かれます。通り

には色々な店がぎっしりと並び、集まる人の数も多く、店などまるで見えず、何も買わずにただ友達とおしゃべりしながら歩いているだけで楽しかったものです。お小遣いは貯金しました。我が家は、母の医療費に追われて家計は火の車。お小遣いなんぞ減多にもらえませんでしたからねえ。ちなみに、夫が子どもの頃食べていたアイスで比べると、夫はチョコのかかった柔らかな20円の「キング」、私はガリガリに凍った5円の「棒アイス」。以上！

団塊世代の私達は、一学年が14組あり、700人以上もいました。この頃私は、体育の時間に脳貧血を起こし、病院に行くと“貧血・低血圧”の病気があるのを知りました。

中央中学校の近くに、母が入院している国立病院があり、(後に移転)学校が終わると真っ直ぐ見舞い、洗濯物を受け取って、行啓通りに出て買い物をする。当時は肉屋さん、魚屋さん、八百屋さん始め保育園、パチンコ店、映画館、病院など、ヒトが生活する上で必要なあらゆるお店がぎっしりと並んでいました。野菜や魚を買うと、やっと行啓通りの終わりに着きます。そこには、とても大きな松の木が植えてあり、その先には“ブラザーミシン”の西洋風の建物が建っていて「ここ迄来れば家まであと少し」と、自分を励ましながら帰ったものです。母が入院すると、自動的に私が台所を担う事になり、こんな毎日ですから、友達に誘われても付き合う事ができず、嫌がらせを受けたこともしばしば。とても暗い中学時代でした。いや、それでも無いか？近所に住む同級生の男子3人と、五稜郭公園でいつまでもおしゃべりして、門を閉められそうになった事や、勉強を教えてもらった事など、思い返せば結構楽しい事もあったっけ。うん、楽しかった！



昭和30年頃の赤川通り 右角は現在北海道新聞函館支社
(北海道写真史料保存会発行「ふるさと回想写真集」より)

経済的な事情もあって、高校は交通費のかからないところという事で、近くの函館商業高校へ。何とか体を丈夫にしたいと思い、陸上部に入ったのは良いのですが、ここでもやっぱり貧血を起こして先輩に迷惑をかけ、すぐに退部、考えが甘すぎたと反省する。高校までは2分。通学途中の出会いなんぞ全く無し。私は病的なまでに、この頃のことを覚えていませんが、放課後に友達と五稜郭公園で遊んだり、2軒あった茶店でお団子を食ったり、堀でボートに乗っているアベックを冷やかしたり、もちろん、ボーイフレンドとのデートを楽しんだり、そんな事だけは実に良く覚えています。「テストの日に休むと、前回の8割もらえる」という誰かの話を信じ、公園内の博物館に隠れてサボった事がありました。隠れているのですから、誰も来ないのはもってこいのはずなのに、誰も来ないのは逆に恐怖もありました。かと言って、一步外に出れば、父の勤める役所は目の前にあるし、近所の人達は行き交っているし、で結局は1時間しか居られず。さらに、制服姿で公園を出る時には、下を向いたまま早歩きで学校に行き、「母が倒れて」と嘘をついて。こんな事はもう二度とするまいと、自分に堅く誓って以来、今日迄、真面目に生きて居ます。(本当です) その博物館も、今はもう無くなりました。

考えてみれば私は、元町・五稜郭と、歴史ある文化の宝庫のなかで暮らしていたのですね。それなのに、“公会堂はお化け屋敷”(当時は公開して居らず、人の出入りも無く、夜は真っ暗でしたから)“相馬邸は友達の家”で、“行啓通り”の名の由来も知らず、五稜郭の成り立ちも、戊辰戦争・新撰組の事も、昭和39年に五稜郭タワーができる迄公園が星の形をしている事すら知らず、自分の住む町を形成する一部として、自分達の暮らしの場として、子ども時代を楽しく生きて来ました。

箱館戦争終結から150年。五稜郭公園はその歴史を伝える場として、多くの人達に感動を与えています。そしてそれは、これから生まれる子ども達へと伝承されて行くのですね。ありがとう。すごく楽しかったよ！



むかいで えつこ 昭和23年函館市生まれ。昭和41年函館商業高校卒業、高校卒業後保育士として函館市内の保育園に勤務していたが、現在は専業主婦。



「青雲台」での思い出

吉田栄一

五稜郭といえば、今年3月某TVでの「日本の名城100選」でベスト10入りしたのには驚いた。

全国的に有名な城を押し出した理由は従来の城にないユニークさが決め手となったのだろうか。

ところで、この五稜郭の公園を半円で取り囲むようにして美術館、芸術ホール、中央図書館、柏野小、五稜郭病院、市総合保健センターなどが所狭しとばかり建ち並んでいる。そして公園東側横に寄り添うかのように建っているのが市立函館高校である。函館高校の前身は、ご承知の通り昭和15年開校の函館市立中学、その後、学制改革で函館東高校となった。函館市立中学の初代校長の岡村威儀氏は「青年は青雲の志を持たなければならない」と広大な校庭を「青雲台」と名付けた。

私は、この「青雲台」に建つ高校、函館東高校の卒業生（昭和33年度）であり、また同校で教職（昭和53年～平成13年）に就いていた。更に柳町の敷地内にあった職員住宅で11年間暮らすなど多くの年月を東高校と二人三脚で過ごしてきた。この思い出多い26年間を振り返ってみた。

【学生時代 昭和31年～昭和33年度】

○昼食時の5円の牛乳

入学してびっくりしたのは、白黒まだらの牛が3頭も敷地内でのんびり草を食んでいたこと。なんとも牧歌的な雰囲気校舎に入ったが、昼食時に保健室にてカップ1杯5円で濃厚な牛乳が飲めることで納得した。これは戦後の食糧事情の悪化を憂慮した当時の校長が生徒・教職員の栄養確保のため、戦時中の生徒の援農による縁故で乳牛2頭を購入したのが始まりであった。その後飼育員を事務員として雇い、最終的には8頭まで増やしたが、この画期的な学校直轄事業も昭和34年に廃止され、牛舎等の跡地にはその後青雲記念館が建てられている。

○行灯行列とフォークダンス

文化祭のメインイベントの行灯行列は昭和31年の生徒会

会長のアイデアから生まれた。各クラスがそれぞれ趣向をこらして制作した行灯をリヤカーに乗せ、市内中心部まで練り歩いたが、当時夜間イベントは珍しく、毎年市民に好評であった。しかしバッテリーは中古が多く、途中で電灯が消えて懐中電灯で間に合わせるなど苦労した。終了後はグラウンドでのキャンプファイアとフォークダンスが楽しみだったが、男女共学とはいえ今のような交際に慣れていない我々はダンスで触れる指先に恥ずかしさを隠して踊ったものであった。この行灯行列も徐々に警察側の交通規制が厳しくなり、現在は東部地区に制限されているという。とはいえ「行灯行列よ、永遠なれ！」と切に祈っている。

【教諭時代 昭和53年～平成13年】

○五稜郭公園

南茅部、稚内各高校を経て昭和53年函館東高校に着任した。19年ぶりの母校、昔と変わらぬ校舎と周りの景色にタイムスリップして感慨一入であった。私の教科は「社会科」で、当時の1年生は必修科目であり皆真面目で我々生徒時代の定番？の早飯や居眠りなどの不届きな生徒はいなかった。隣りの五稜郭公園は絶好の課外授業の場でロングホームルームとしてしばしばクラス単位で利用したほか、テニス部の顧問として外堀でのランニングやラケットの素振りなどで部員と汗を流していた。ちなみに本校の校章・校旗には五稜郭の桜のつぼみを象っており公園との関わりは深い。

○「地理巡検」

本校の教育活動の一つで現在は実施されていないが、「地理巡検」があった。1年生に野外を教室として観察眼をあらたにして目的地の資料収集と調査活動を通して調べてもらうもので、昼食持参でバスと徒歩で市内の工場、サイベク遺跡、西部地区、七飯町果樹園などへ。クラスごとに4、5名の班単位で行動し調査するが、生徒もそれなりに準備しテープレコーダーを持つこともあった。

○その10周年記念特集の発行

着任して1年後に特集「函館とその近郊—地区巡検の記録—」を発行した。手書きでまとめた214頁ものレポートには新1年生の意気込みが感じられた。そのひとつの感想で「今の街並みの建物には薄っぺらさと冷たさを感じる。昔の建物には心があり、人々の真心がこもっている。この由緒ある場所を都市化という怪物に破壊されたくないし、残しておきたい」と。

○五稜郭は城なのか

このレポートには五稜郭の調査が4件あり、そのうちの1件の中で、「五稜郭は城なのか」の項目があった。その結論として、長野県白田町の竜岡城跡（形態はミニ五稜郭）と比べて、この城は藩主の居城としての「史跡竜岡城跡」である。一方、五稜郭は「特別史跡五稜郭跡」と城の文字は無い。言ってみれば五稜郭は幕府の出先機関を兼ねた砦とみるべきであろう、と考察している。



昭和33年頃の東高校校門（東高50年誌より）

【職員住宅での居住 昭和53年～平成13年】

○築後40数年の住宅

引っ越して驚いた。静かな住宅街の柳町の校舎、道路を挟んだ野球場の奥に自然豊かな林や草地、と云えば聞こえはいいが、その中に10数戸の古色蒼然たる木造住宅が建ち並んでいる。なんと築後40数年とか。それでも2年後には隣りに建つ風呂付きの住宅に入れたが、ここも周りは樹木が豊かに？生い茂り、室内は昼間でも薄暗く照明を必要とした。しかも風呂場にはワラジ虫やナメクジが住み着いてとても入浴を楽しむ状況ではなかった。

○とはいえメリットも

まず通勤は徒歩5分の至近距離、これは有り難かった。また、裏側の空き地の畑で数々の野菜を栽培し収穫する楽しみがあったが、草取り中に数種類のカエルが飛び出てびっくりしたものだ。子供達にとっては絶好の遊び場でトンボや虫捕りなどに夢中であった。また、春ともなれば玄関前の樹にウグイスが止まり美声を披露してくれるなど楽しみもあった。

その後平成13年に11年間の職住環境を脱出？して北美原地区に引っ越したが、今は沢山の思い出の詰まった「青雲台」での生徒時代と教員生活、そして職員住宅での生活を忘れることはない…。



よしだ えいち 昭和15年茅部郡尾札部村（現函館市）生まれ。岩手大学学芸学部卒業後、南茅部高校に奉職し、昭和53年から母校の函館東高校勤務。平成13年定年退職。現在、函館テニス協会ジュニア委員会委員長。



私の五稜郭公園

伊 藤 暁

昭和18年生まれの私が子ども時代で自慢できることと言えば「豊かな外遊び」の恩恵を腹一杯身につけ得たことだと思っている。時にはミソッカスという呼び名で兄たちの尻にくっつき、時には同年の輩と徒党を組んで遊んだ「外遊び」は学校以外の時間のすべてだった。

そして、その私の外遊びを支えてくれた主たる遊び場が五稜郭公園だったのである。

五稜郭公園が特別史跡になったのは私が小学生の頃だったと思うが、その頃の私に五稜郭公園の歴史的価値とかは無意味で大事なことは土塁の起伏、堀の水、張り巡らされた石垣、何にも無い広場、うるさいことをいう大人がいな

いという環境だった。そう、その頃の五稜郭公園は私たちの「外遊び」を抱き留めてなお余裕のある遊び場だった。

冬、土塁はさまざまな勾配の坂を用意して私たちに橇遊びをさせてくれた。年齢や度胸によって冒険心を満足させたり自分の臆病さを思い知ったりした。冬、堀の水が凍ると恐る恐る乗っかって大丈夫とわかるとただ長靴で滑り転んで面白かった。時にはスケートを持ってくるやつがいて羨ましかったが我が家にはそんな金は無かったし、滑り転びながら長靴で石ころを蹴り遊ぶだけのやつの方が多かった。

今、図書館が建つ場所と堀の間に三角形の草っ原があった。そこで遊んでいてボールを堀に落とすことがあった。棒を探しに行くやつ、石をボールの向こう側に投げ、波紋の力でこちらに寄せようとするやつ、石垣を伝い降りて手を伸ばすやつ…。私は石を投げるやつのために石を集めていたと思う。たまに石を投げてボールの手前に落ち、みんなに怒られるようなこともやったに違いない。堀にボールを落とす前は、三角ベースか何かをやっていたはずなのに終いにはボール回収が目的の遊びになっていた。あちこちに石垣が崩れた場所があったが、そこは釣り竿を持たない私たちの釣り場になった。棒きれに糸をつけて拾ってきた針に餌だけは大きなミミズをつけて釣れない鮒を待っていた。暑いときは崩れた水際で裸足の足を水に入れていた。今は崩れるとすぐ「キケン」の立て札が立ちロープが張られるがあの頃は崩れたところにそんな立て札は見たことが無かったし、学校からも親からも危険だから近づかないように言われたことも無かったように思う。私の勝手な記憶違いかもしれないが。

昭和29年、五稜郭公園が北洋博覧会の会場になりある期間遊べなくなった。開幕が楽しみで楽しみで仕方が無かったがいざ始まってみると、入場料も必要だし子どもだけでは行けなかった。誰かが「裏門の堀の水が乾いている」と言う情報を持ってきた。早速石垣を降り、葦の間を走り忍者さながら石垣を上って会場に侵入した。そこで何かしたという記憶が無い。お金が無かったから何もできずただうろろしていたのだろうが侵入のスリルは今も覚えている。

今奉行所が建っている場所は私たちの野球場だった。今で言えば奉行所正面の左端の角あたりが二塁ベースだった

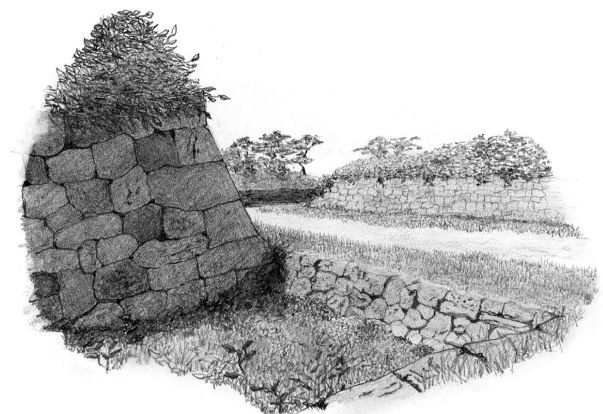
ろうか。盗塁してきたやつが「あや」をつけて滑り込んだ。タッチに入った私は足をすくわれて手首から落ちた。その夜倍以上に腫れ上がった手首を祖母が酢と麦粉で作った自家製湿布葉を塗って冷やしてくれた。そういえば祖母は山から採ってきた草を煮詰めて腹痛に効く薬も作ってくれた。どこのおばあちゃんもみんなそうだと思っていたが、違うことがわかったのはもっと大きくなってからだった。

現在地に中央図書館が建つ前は渡島支庁舎が建っていたが、さらにその支庁舎が建つ前は私の家の裏窓から公園の西側の石垣が見通せた。桜のシーズンは居ながらにして花見もできたが、酔った花見客が堀に落ちるのを見るのが楽しみだった。人が困るのを笑いとばすのは不謹慎と言えど不謹慎な楽しみだが父の酔っ払いぶりがいやでたまらなかった腹いせだったのかもしれない。

ある日突然、重要な外遊び場の一つ今の図書館と西側堀との間の草っ原一面に丈1メートルほどの桜の苗木が整然と植えられた。今は老木となり時期にはバーベキューの煙で賑わうお花見所だが、その頃から五稜郭公園は窮屈な感じになった。

一方、私も中学生になって部活が始まったり、アルバイトで新聞配達をするようになって生活が変わってきた。その代わりにように堀の水面に桜が散り浮く景色や、武者返しの石組に初雪が白い模様を作る景色の美しさに気づくようになった。成長と言うのかもしれない。

私の子ども時代、「外遊び」と言う文化があり、それを享受させてくれた自然、社会、人があった。数年前までは「こんなに優れた外遊び文化は現代の子ども達にも」と思っていた。今だって、広場に奉行所が建っていようが、ケケ



自作スケッチ「五稜郭裏門付近の石垣」

ンの立て札があろうが外遊びはできる。しかし大人社会がそれを許さない。私もその一人だ。怪我をしたら誰が責任を取るの…と言う時代になってしまった。今の子どもは今できる遊びで育てばいいのだと思うことにした。

私には「外遊び」を腹一杯身につけ得た時代があった。

それを支えてくれたのが五稜郭公園で、今思えば腹は常に空かせていたけれど本当に幸せだった。



いとう さとる 昭和18年函館市生まれ。北海道学芸大学函館校卒業後、島牧村小学校教諭に奉職し、その後函館昭和小学校、金堀小学校などに勤務、平成16年3月定年退職。



函館野外劇と私

幸野 三和子

私の好きな五稜郭は、春から夏にかけて行啓通りをライラックの甘い香りに安らぎを感じながら歩き、ふと気がつくと五稜郭タワーの全景が見えてくる。私の記憶は定かではないが、満開の桜並木も出迎えてくれ、五稜郭の星形の地形は桜の花のピンク色と木々の緑のコントラストで絶景のロケーション。私も観光客気分ですブラボー!!

桜が散り初夏を迎える頃、私のライフワークにしている「市民創作劇 函館野外劇公演」が始まる。函館野外劇の一スタッフとして緊張の瞬間がスタートする時でもある。

昭和63年（1988）7月、今から32年前函館野外劇創設者フリップ・グロード神父の提案で第1回公演がスタートした。

私ははからずも当時の水舞台で他のメンバーと共に箱館開港のシーンの賑わいを楽しみながら（？）ステップを間違わないように踊ったのが、記憶の中に今でも鮮明に残っている。当時は土舞台、水舞台があり（五稜郭の堀が使用できていた頃）観客席も堀を挟んで1,500人が収容でき、圧巻の舞台となった。

野外劇には、人間の他に「ドサンコ」と言われている和種馬数頭が立派な役者で出演していた。グロード神父が函館の発展に欠かせないドサンコを是非と言うことで実現し、第3回公演から私が馬担当の「馬のオバサン」に変身し、以来彼女（オバアチャン）達と私の長いつきあいが始まった。馬の出演シーンは客席側と土舞台側に数頭ずつ別れ、

土舞台と言われる真っ暗な茂みで出番を待つ。私は土舞台側につき、慣れない暗がりや長靴、懐中電灯そして黒のゴミ袋（今では馬のシーンのみ使用）の3点セットを持ち走り回ったのがつい昨日のように思い出される。客席から競争のシーンで中央舞台での迫力ある演技には「オー」という感嘆の声がこちらの私のところまで届いていた。

ここでドサンコの役者の皆さんのエピソードを是非紹介させてもらい、ドサンコをより知ってもらいたいと思う。

馬の種類は多い時で6頭くらい出演していたこともあったが、先に紹介したとおりほとんどが牝馬のオバアチャン…、性格がおとなしく、穏やかでひたすら自分たちの出番待ちにもイライラせず、五稜郭の石垣の草や道端の草をモグモグタイム、心構えが違うなあ当日参加している役者の皆さんと比較をしてしまう。当時は、馬の持ち主が鱒川町から家族4人で4頭（うち白毛が1頭）、東山町から2人で2頭、合わせて6頭の役者は名演技で観客を魅了した。ある時、鱒川から白馬の馬と生まれて数日の子馬が参加した。母馬は子馬が気になり落ち着かない様子がよくわかり、本番で母馬が子馬からはなれると子馬は母馬を探して悲しそうな声で「ヒヒヒーン（おかあさ～ん）」と呼んでいるようで、動物の世界の親子の強い絆を感じた瞬間でもあった。

さて本番、馬の役者はそれぞれの舞台で出番待ち、耳をピンと立て、鼻は大きく開き、音楽を聞き分け、いざ出番と言うとき人間と同様に緊張しているのかトイレがないのでその場に「ポタポタ」「ジャー」…。私の出番は慌ただしく終わり、馬の乗り手は馬の腹を軽く蹴り、「いざ、ゴー」そのシーンを終わって私は見届けると次のシーンの場所へ

移動するため馬を誘導する。馬のご飯はなく空腹で来ているためその辺の草をムシャムシャ、出番が終わると乗り手と一緒に厩舎へと急ぐ。私は馬の出番が終わるとホッと一安心。

野外劇の舞台が郭内に土舞台や水舞台を作り使用していたが、ご承知のように石垣の崩れ等の影響で数年前から五稜郭公園入り口広場で開催されている。ドサンコも乗り手などの都合で東山の「シロ」おばあちゃん（推定100歳）1頭が本当に頑張って出演してくれて舞台を盛り立ててくれた。残念ながら今年の公演（7月12日～8月10日）には「シロ」の出演はなく、鼻面を撫でたときの気持ち良さそうにしていた顔が忘れられず寂しさもあったが、東山の牧場で余生をゆったりと過ごしてほしいと今は願うばかりである。

私は野外劇で公演当日の馬担当以外に3月頃から出演者確保のため、個人・団体企業等への働きかけで忙しくなる。今年も1公演に200人から300人が出演。また、出演者以外のスタッフなどを含めた大所帯となり、五稜郭の至る所で大きなコミュニティの輪が広がった。毎回この輪の中で色々な人達と様々な出会いがあり、私は野外劇に携わった32年間で知り合った人達とのつながりは大きな財産といっても過言ではないと思っている。



昨年公演でのアイヌ曹長コシャマインと戦うシーンの「シロ」の名演技

五稜郭の印象は最初に書いたとおりの印象以外に、他の地区とは違い五稜郭は商業活性と多くの歴史に埋もれているような気がしており「ノスタルジア」という言葉が相応しいと思っているのは私だけだろうか。

函館野外劇という場で自分が気づかない小さな花を咲かせることが出来、この小さな花を大切に咲き続けさせなければと今は思っている。

改めて感謝をしたい。ありがとう「五稜郭」！「野外劇」！



この みわこ 昭和22年函館市生まれ。昭和41年函館西高校卒業後、日魯漁業㈱入社。昭和63年函館野外劇のスタートからスタッフとして携わり現在に至る。

次回テーマは「路面電車」

特集「函館の歴史と文化を語り継ぐ」も次回は5回目となります。5回目のテーマは、「市電」の愛称で親しまれ、函館の町を走り続ける「路面電車」としました。大正2年（1913）に函館のまちに路面電車が走り始めて106年、多くの市民が通勤・通学に、また、買い物などに利用されておりますが、そんな市民の足としてなくてはならない「路面電車」まつわる会員皆さんの思いやエピソードをお寄せください。お待ちしております。

【応募規定】

- 1 「路面電車」にまつわる思いや出来事
- 2 文章は原稿用紙6枚程度（2,400字）で、関係する写真1枚の掲載も可能。なお、原稿には趣旨を損ねない程度に手を加えることがあります。
- 3 原稿は、封書、FAX、メール等で令和2年7月31日(金)までに函館文化会へ送付ください。
- 4 出来れば、これまでに寄稿されていない会員の応募をお願いします。
- 5 原稿の送付先、問い合わせは
函館文化会事務局 TEL・FAX 0138-57-1175





須藤隆仙先生を偲ぶ

近江幸雄

昨年のも押し迫った12月12日道南郷土史界、いや北海道史界の重鎮であり、恩人とも言うべき須藤隆仙先生が忽然としてこの世を去りました。誠に惜しまれます。

須藤先生は函館市船見町の古刹称名寺の住職を務め、仏教史研究に打ち込む傍ら南北北海道史研究会会長として道南に腰を据えた視点から多くの著書、講演、発言を通し北海道史研究や函館の文化発展に大きな足跡を残されました。20代後半から半世紀余、須藤先生のお側にいて目の当たりに見聞きした教えや研究の成果を思い起こしながら偲びたいと思います。

須藤隆仙先生と私は、平成8年(1996年)北海道新聞みなみ風創刊時から17年間、「はこだて人物散歩」と「どうなん人物散歩」を交替執筆し、300人を超える人物を紹介しました。その間の私たちはまさに以心伝心の関係でした。例えば宗教関係は須藤さん、芸能関係の人物は私などとそれぞれの得意分野ですみ分け、細かな打ち合わせなどほとんどしなくてもかち合うこともなく紹介できました。須藤先生はこうした原稿はもちろん話も軽妙でわかりやすく研究成果に裏打ちされた人物像が活写されていました。そしてそれは郷土函館、そして道南に対する深い愛情にあふれた文章でした。

この「人物散歩」では幕末に活躍した新撰組副長土方歳三、明治政府の要職を務めた榎本武揚から、書家金子鷗亭など道南になじみの人物だけでなく、土方らを書いた作家司馬遼太郎が来函した時のエピソードを紹介、また、石坂洋次郎が小説「若い人」の舞台に函館・遺愛女学校を念頭に置いていたことなどほとんど知られていない史実もきめ細かく調べられて書かれていました。

数々の対談の中では「かつての函館の人による支援活動はいくらでもあります。弁天の回船問屋洪田利右衛門は若き日の勝海舟に今で言えば1千万円以上になるカネを持た

せていますし、相馬哲平は函館図書館の設備拡充に私財を投じました」「実は島崎藤村が《破戒》を世に出せたのも、函館にあった妻冬子の実家、秦家の援助があったからです」「昭和9年の大火の翌年に行われた第1回港まつりには、函館の街を元気づけようという当時の函館市長坂本森一氏の思いが込められています」などなど、函館には先見性にあふれたすぐれた先人が残した素晴らしい業績や貴重な歴史遺産、資源がたくさんあることを紹介しながら今の函館がそれらをかみならずも有効に活用し切れていないことを熱く語っていました。

一方、「私(隆仙氏)も今の函館には元気がないように思います。函館の人は奥ゆかしいというか受け身がちなところがあります。観光資源の売り込みが難しいのはわかりますが、新撰組が瓦解した「辨天岬台場」(今の函館どつく前)など観光案内書に載せるべき場所はまだまだあります」「函館の誇る夜景は西部地区の人口の減少などで家屋が減った結果かつての輝きを失いかけています。夜景を本当に自慢したいのなら一軒一灯運動のようななんらかの対策を講じる必要があります」「函館は北海道をリードしてきた実績があります。他の街とは比べものにならないくらい先人の足跡から学ぶ物は多いはずですよ」と、函館愛あふれる発言、提言も憚ることはありませんでした。そういう意味でも貴重な人を失った思いです。

深い研究の成果を難しい言葉で学問的に説くのではなく、道南や函館の歴史を人間的な側面からわかりやすい言葉で多くの人に伝えてきた須藤先生の功績はとても大きいと思います。「人々の織りなした事が歴史となり、未来への碑となります。みなみ風に掲載させていただいた人物の数々の功績や知恵が人生の一助になれば幸いです。」(みなみ風創刊20周年記念地域文化賞受賞時談)と語り、須藤先生の活動が郷土函館の将来を思う心や函館市民への深い愛情に根ざしていることがわかります。

函館に元気が無いと言われる今こそ、須藤先生を目指し、

須藤先生の研究を継ぐ若い人の出現が待たれます。

個人的な思いになりますが、私が神山茂賞受賞の際は推薦人になっていただいたり、受賞祝賀会の発起人になっていただいたり、と何かと私を引き立ててくださいました。感謝の他ありません。先生が北海道新聞社の講師をされていたとき体調を崩され、急遽代理を務めさせていただいたことがあります。聞いてくださった方が満足されたかどうかは不安でしたが、須藤先生のお役に立てたことで恩返し

の一端が果たせたかなという思いになったこともあります。また、須藤先生が「みなみ風創刊20周年記念地域文化賞」受賞の時の推薦文を書かせてもらったことも誇りとするところです。

私は20代から港道蔵男氏、木下順一氏、中村純三氏らの「函館読書人会」に参加させていただき、特に須藤先生に目を掛けていただき大変お世話になりました。

3月15日、称名寺での須藤隆仙先生の葬儀会葬の帰り、弁天町小公園に「新撰組最期之地」碑があり、そこに記された須藤隆仙先生、斉藤裕志先生、私の連記を懐かしく拝礼して参りました。須藤隆仙先生との思い出は限りなく尽きることはありません。私にとっては総てが大事な遺産となりました。

合掌



函館文化会創立130年記念講演での須藤隆仙氏（平成22年）

故 須藤隆仙氏プロフィール

船見町の浄土宗称名寺住職で、郷土研究者としても活躍された須藤隆仙氏が平成30年12月12日逝去された。享年89歳。須藤さんは昭和4年（1929）に上磯町（現北斗市）出身で大正大学仏教学部卒業、浄土宗称名寺の住職を務める傍ら、仏教史研究に入る際、郷土との係わりについても研究の幅を広げ、函館、道南地域の埋もれた歴史、風俗、人物を掘り起こし、長年に渡り南北海道史研究会会長として精力的に活動された。一方、文化財保護審査会委員などを務め文化行政にも多くの功績を残した。昭和57年に函館市文化賞受賞、昭和60年に北海道文化奨励賞受賞。箱館戦争関連をはじめ、「高田屋嘉兵衛」「箱館開講物語」など郷土史研究に関わる著書を多数残している。

● 会員を募集しております ●

函館文化会では「郷土の文化を顕揚し、その振興発展を図ることを目的」に活動を続けておりますが、この趣旨に賛同いただける方を募集しております。

皆さんの近くに入会いただける方がおられましたら電話、FAX、メールなどで文化会事務局にお知らせいただけますでしょうか。「入会申込書」をお届けいたします。

● 函館文化会の助成制度について ●

函館文化会では、郷土文化振興事業の一環として郷土文化団体が函館市内において開催する講演会、展示会及び芸能発表会などに対し予算の範囲内で助成を行っております。

事業の実施前に申請を受け、審査の上助成の可否決定いたします。詳しくは、文化会事務局にお問い合わせください。

事務局からのお願い

会員皆様に「住所」「電話番号」に変更が生じましたら、事務局に連絡をお願いします。



クリミア戦争が運んできた五稜郭と 旧幕府軍工兵が造った四稜郭

野戸 崇治

安政2年(1855)箱館に入港したフランス軍艦が五稜郭の築城書をもたらしたことは皆さんご存知の通りです。そして箱館戦争で四稜郭を初めとする土塁がたくさん築かれた。

クリミア戦争極東編

1853年ヨーロッパで始まったクリミア戦争では、英仏連合軍の艦隊はロシア艦隊を撃滅すべくはるか極東カムチャッカまでやってきた。フランス国立図書館のデジタルアーカイブから、この当時のフランス艦隊の行動を海軍士官学校の教科書としたものを発見した。写真は仏軍モンラベル、英軍エリオット、露軍ザボイカという司令官の名前とアムール河方面への航跡がかれた地図である。

この時、遠路やってきた仏軍艦には病人が増え、ビタミンの不足から来る壊血病で、そのことが教科書には以下のように書かれてある。

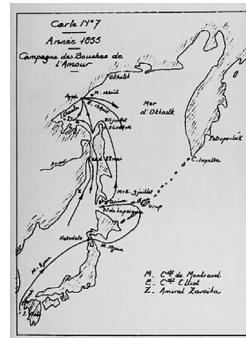
「仏海軍シビル号は二週間前から壊血病の流行に見舞われていたので、療養のために急いで函館に向かわせなければならなかった」

仏艦シビル号箱館入港

下田・長崎では、条約締結前のフランスに対しては欠乏品の補給は許しても上陸に関しては厳しく対処していた。しかし箱館では、奉行竹内(たけのうち)保徳は人道的措置として、幕府の許可を得る前に即座に上陸療養を許可した。

こうしてシビル号はじめ3隻の仏軍艦が入れ替わりに入港し、約100名が上陸療養した。その中のコンスタンチヌ号の士官が奉行所役人に操船法などの指導とともに反射炉・大砲製造に関する資料書と、築城に関する資料を贈った。

それが、武田斐三郎による五稜郭築造につながったのである。ところでその五稜郭築造資料については、フランス語で書いてあったので武田は直接読むことは出来なかった



英仏とロシア艦隊の航跡



箱館奉行 竹内保徳

ので、後にオランダ語に訳したものを讀んだ、などと書かれているものもある。以前はオランダ式築城といわれていたが、今はヴォーバン(仏)式築城ということで異論がないようだ。ただその原書が、仏人サハルトのものなのか、同じく仏人ベルのものなのか、はたまたフランス源流の築城方をまとめたオランダ人ケルキウェーナのかははっきりしていないようだ。

そして、箱館に上陸し療養したことをフランス海軍は決して忘れることなく、150年後、その時なくなった6名の慰霊と感謝のため一隻の軍艦を函館に派遣した。

遣欧使節団

フランス軍の上陸を許可した初代函館奉行竹内保徳は、その後箱館奉行の経験とその前のペリーとの応接役であったことなどの経験から、第1回遣欧使節の正使として英仏露などを訪問する。

第1回の使節団に同行していた柴田剛中は、第3回訪欧使節正使として英仏を訪問し、横須賀の製鉄所建設と箱館と深いかわりを持つことになるフランス軍事顧問団の招請の交渉をまとめて帰国した。

フランス軍事顧問団

慶応2年(1866)12月8日、15名の軍事顧問団が横浜に到着し、砲兵・歩兵・騎兵の軍事教練を開始した。後に4

名が追加され、最終的には19名となったが、その追加された中に工兵大尉ジョルダンと工兵下士官ミッシェルがいたが、日本到着は先発の一年遅れの慶応3年末だったので、慶応4年1月に勃発した戊辰戦争に、どれだけの伝習が来たのかはよくわからない。

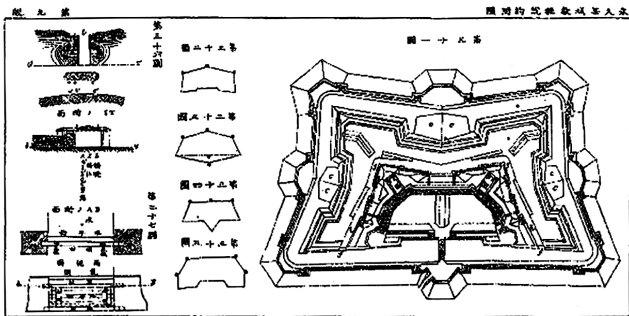
幕末の兵学者たちと築城書

軍事顧問団の招請以前に、幕府は黒船来航後軍制の改革に着手し、慶応2年8月ころから更なる軍制近代化をめざし改革を行なった。この頃オランダ経由で長崎から入ってきた軍事関係の書物がたくさんあり、兵学もさかに行なわれ、主な兵学者には、高島秋帆、江川英龍、佐久間象山、勝海舟、大鳥圭介などがいた。

幕府はオランダを介してたくさんの書籍を収集した。当時知られていた築城書には次のようなものがある。

「築城典刑」「築城学入門」「築城教程説約」「斯氏築城典刑」「和蘭築城書寛政2（1790）年（前野良澤訳）訳」「要塞初問（工兵初問）サハルト著ナニング訳 佐久間象山遺物 1828年刊」

前野良澤が1790年にすでに翻訳をしていたこと、1828年に出版されていた装丁も立派な書物を佐久間象山が入手していたことには驚く。



永久築城教程説約抜粋

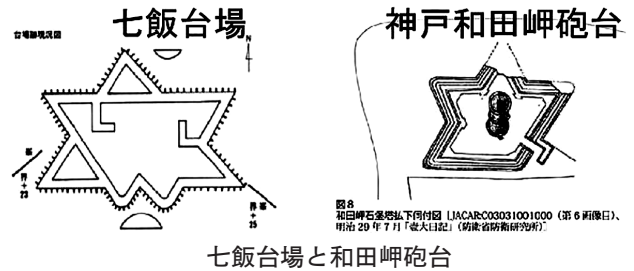
幕末の土塁・砲台場

ペリー来航に驚いた幕府は、江戸湾に急いで台場を築き、その後も、箱館、堺、大阪、神戸と次々造られます。幕府は同時に各藩にも台場築造を命じた。そして出来た一つが松前藩戸切地陣屋です。松前藩士藤原主馬、あるいは武田作郎の設計といわれており、当時の松前藩は多くの藩士を国内留学させている。

- ・佐久間象山へ 藤原主馬、下国東七郎

- ・江川英龍へ 武田作郎
- ・武田斐三郎へ 村田千万太郎、代島侍郎
- ・福沢諭吉へ 吉田衡平
- ・長崎留学 福井淳三

このほかにもまだ多くの留学生たちがいるが、注目すべきは戸切地陣屋がこれらの留学生の力で五稜郭築造開始前に完成し、しかも、唯一の洋式だということである。



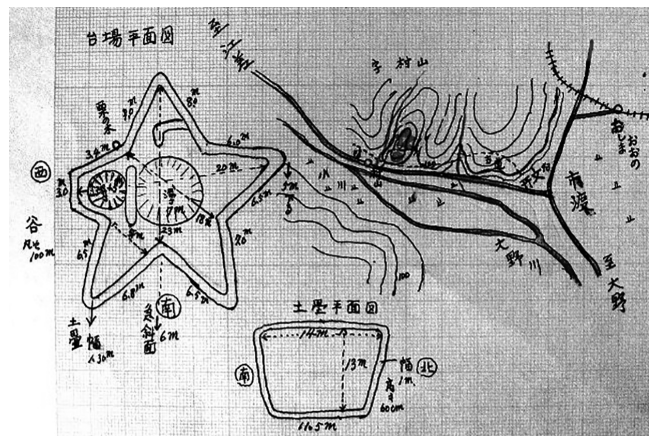
七飯台場と和田岬砲台

箱館戦争と土塁

鷲の木から上陸した旧幕府軍は、松前・江差方面をあっという間に掌握し、翌明治2年（1869）5月決戦までの短期に多くの土塁や壕を構築した。五稜郭裏手の四稜郭、激戦地だった二股口や矢不來がよく知られている。そのほかにもほとんど知られていないが、七飯町の長川清悦さんが発見した函館と大沼の間の山上にある七飯台場、二股口の大野側手前にかつてあった鼻コクリの台場などがある。

七飯台場は、規模はとても小さいが七つの稜堡を持つことから七稜郭とも呼ばれている。これは、勝海舟の設計で1864年に神戸和田岬に造られた砲台の稜堡によく似ている。

鼻コクリの台場は記録資料で知るのみだが、五稜郭の小型のような土塁だったのだが、残念ながら開発とともに削り取られてしまい、今は見ることは出来ない。



鼻コクリの台場

旧幕府軍の工兵

フランス軍事顧問団が到着したときには幕府にはすでに、築造兵という名称の工兵が存在していた。それで、後に工兵の指導教官2名が追加になったのでしょう。

大鳥圭介は1864年、顧問団到着の2年前にペル著の築城書「築城典刑」を、吉沢勇四郎もストレイト著「斯氏築城典刑」を1865年陸軍所から訳出している。

戊辰戦争が江戸から東北に戦場を移したとき、幕府軍の工兵200名ほどが大鳥圭介に従って東北に向かっている。箱館でも各種の幕府軍名簿から工兵隊が存在していたことがわかっている。「館戦争始末記 栗賀大介」の、「九箱館降伏人名簿」の項には工兵隊70名以上と記されており、隊長に名前のある小菅辰之助はその後、明治5年陸軍軍人となり、陸軍工兵隊創設に尽力した。

四稜郭は誰が造ったのか

ともあれ箱館戦争時には、大鳥圭介を筆頭に築城に通じた多くの工兵、今風に言えば土木技術者たちがいたわけで、築城典刑などの教科書には、五稜郭程度の土塁築造法が絵図入りで書いてある。箱館戦争やその前の東北の戦いで一番必要だった小規模の土塁などの築造は、基本の応用としては簡単なことだったはずで、いくつも造っていたはずだ。特に四稜郭は、先に示したように教科書の中によく似た構

造があり、五稜郭以前に松前藩が造った同様構造の戸切地陣屋もあった。

道南地方の戦場となった場所には、あまり知られていないが台場とか壕と言われる遺構が数多くあり、最近も函館市内で「三稜郭」発見などということも耳にする。

四稜郭の設計者について、大鳥である、いやフランス人のブリュネだなどの論争があるようだ。しかし、これまで調べたことを考え合わせると、そんなことは問題にならないほどに当時の工兵の技術は高かったのではないだろうか。

おわりに

近頃はインターネット経由で閲覧できるデジタルアーカイブがものすごい勢いで増殖している。特に外国には初めて目にする貴重な史料が保存されている場合もあり、それによって新しいことがわかったり、謎が解けたりする。最近はそのようなことにどっぷりはまり、函館の新事実を捜し求めてインターネットの海を航海している。



のと たかはる 昭和29年函館市生まれ。昭和50年国鉄就職、東京にて勤務。函館不在歴40年の後、江戸時代からの函館の写真に魅せられ、「箱館写真」探しの旅に出る。現在東京と函館のデュアルライフを実践中。NPO「箱館写真」の会代表。

第7回市民公開講座は湯倉神社で開催



健康祈願正式参拝



本殿での講座



湯倉神社



湯川温泉発祥之地碑

第7回市民公開講座は、「湯の川温泉」をテーマに湯倉神社本殿において開催しました。講座の前に受講者の健康祈願の「正式参拝」を伊部宗博宮司にお願いし、また、講座修了後は、湯倉神社境内の由緒ある施設を伊部宮司に解説をお願いし、案内していただきました。(講座の内容は18ページに)



豊受稻荷神社

平成30年度 函館文化会 事業報告及び収支決算

5月28日に開催されました令和元年度定時総会において、平成30年度函館文化会事業報告及び収支決算が承認されましたので、その内容についてお知らせいたします。なお、事業報告、収支決算等についてのお問い合わせ及びご意見、ご要望がありましたら事務局にお寄せください。

平成30年度 函館文化会事業報告

1 郷土史研究者奨励事業を通じ郷土の文化を掲揚し、その振興を図るため、次の事業を実施した

(1) 「神山茂賞」の贈呈

(定款第4条第1号に掲げる事業)

- ・日 時 11月7日(水) 午後4時30分
- ・会 場 五島軒本店
- ・受賞者 神山茂奨励賞
はこだて外国人居留地研究会 様
贈呈式後、受賞者記念講演及び受賞者を
囲み祝賀会を開催

・受賞者記念講演

「箱館開港と異文化受容を考える」

はこだて外国人居留地研究会

会長 清水 憲朔 氏

(2) 講 演 会

(定款第4条第2号に掲げる事業)

- ・日 時 10月13日(土) 午後1時30分
- ・会 場 函館市中央図書館 視聴覚ホール
- ・演 題 函館は文化の十字路
～様々な宗教の中で育まれた街～
- ・講 師 佐々木 馨 氏
(北海道教育大学名誉教授)

(3) 第5回「市民公開講座」

(定款第4条第2号に掲げる事業)

- ・日 時 8月27日(月) 午後1時30分
- ・会 場 カトリック元町教会 聖堂
- ・演 題 函館の町並みは誰がつくったか
- ・講 師 山本 真也 氏
(日本建築学会会員、元町倶楽部会員)

(4) 第6回「市民公開講座」

(定款第4条第2号に掲げる事業)

- ・日 時 3月20日(水) 午後1時30分
- ・会 場 日本中央競馬会 函館競馬場
- ・演 題 近代競馬の誕生と函館競馬場
- ・講 師 秋永 和彦 氏
(JRA競馬博物館学芸員)

(5) 会報の発行

「会報80号」を10月1日発行

2 郷土文化振興のため、文化団体が実施する事業を後援し、或いは助成した

(1) 後援事業

(定款第4条第1号・第2号・第4号に掲げる事業)

- * 函館朗読紀行 Vol.12-2018
第3回芥川賞受賞作品「コシャマイン記」
函館朗読奉仕会 8月23日
 - * 第63回北海道奎星会書道展覧会
北海道奎星会 8月23日～8月25日
 - * 第16回青春海峡文学賞
北海道高等学校文化連盟道南支部文芸専門部 8月25日
 - * 第47回野間読書推進受賞記念「古典の日」朗読会
函館朗読奉仕会 11月1日
 - * 第95回赤光社公募美術展
赤光社美術協会 10月12日～10月17日
 - * 「小さな親切」作文コンクール
「小さな親切」運動函館支部 12月15日
 - * 第19回函館大学弁論大会
函館大学弁論大会 12月9日
- 以上 7事業

(2) 協賛・助成事業

(定款第4条第1号・第2号・第4号に掲げる事業)

- * 箱館戦争・追悼百五十回忌、記念事業
 - * 第63回北海道奎星会書道展覧会
 - * 第16回青春海峡文学賞
 - * 函館朗読奉仕会朗読会函館朗読紀行 Vol.12-2018
 - * 第95回記念赤光社公募美術展
 - * 「小さな親切」作文コンクール
- 以上 6事業

3 会 議

(1) 総 会

ア 定時総会 5月24日(木)

於：フォーポイントバイシェラトン函館

(議 題)

(ア) 議 案

- * 平成29年度事業報告について 承認
- * 平成29年度収支決算及び監査報告について 承認
- * 役員(理事、監事)の選任について 選任

(イ) 報 告

- * 平成29年度収支補正予算について 了承
- * 平成30年度事業計画について 了承
- * 平成30年度収支予算について 了承

- * 「講演会」の開催について 了 承
- (ウ) 卓 話 (総会議案審議終了後)
 - ・ 演 題 三味線人生よもやま話
 - ・ 講 師 杵屋勝幸恵 氏 (三味線演奏者)

(2) 理事会

- ア 第1回理事会 5月24日(木)
 - 於：フォーポイントバイシェラトン函館
 - (議 題)

(ア) 協議事項

- * 平成30年度定時総会提出議案について 承 認

- * 神山茂賞選考委員会委員の選任について 承 認

- * 会員の異動 (入会・退会) について 承 認

- (イ) 報 告

- * 「講演会」の開催について 了 承

- * 「市民公開講座」の開催について 了 承

- イ 第2回理事会 5月24日(木)
 - 於：フォーポイントバイシェラトン函館
 - (議 題)

(ア) 協議事項

- * 会長、副会長、常務理事の互選について 承 認

- * 顧問の選任について 承 認

- * 企画委員の選任について 承 認

- * 神山茂賞選考委員会委員の函館文化会推薦委員の選任について 承 認

- * 函館市文化団体協議会理事の推薦について 承 認

- (イ) 報 告

- * 今後の日程について 了 承

- ウ 第3回理事会 9月26日(水)
 - 於：函館大学会議室
 - (議 題)

(ア) 協議事項

- * 「平成30年神山茂賞」の贈呈について 承 認

- * 会員の異動 (入会・退会) について 承 認

- (イ) 報 告

- * 「講演会」の開催について 了 承

- * 定款第23条第5項の規定に基づく報告について 了 承

(会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告)

- * 今後の日程について 了 承

- エ 第4回理事会 1月29日(火)
 - 於：フォーポイントバイシェラトン函館
 - (議 題)

(ア) 協議事項

- * 平成31年度事業 (案) について 承 認

- * 会員の異動 (加入・退会) について 承 認

- * 今後の日程について 承 認

- (イ) 報告事項

- * 平成30年度事業実施状況について 了 承

- * 平成30年度予算執行状況について 了 承

- * 第6回「市民公開講座」の開催について 了 承

- * 谷地頭町駐車場湧水対策排水整備工事について 了 承

- * 「郵便振替手数料」の改訂に伴う対応について 了 承

オ 第5回理事会 3月20日(火)

於：ホテル法華クラブ函館

(議 題)

(ア) 協議事項

- * 平成30年度収支補正予算 (案) について 承 認

- * 平成31年度事業計画 (案) について 承 認

- * 平成31年度収支予算 (案) について 承 認

- * 「講演会」及び「卓話」について 承 認

- * 「卓話」について 承 認

- * 会員の異動 (加入・退会) について 承 認

(イ) 報告事項

- * 定款第23条第5項の規定に基づく報告について 了 承

(会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告)

- * 今後の日程について 了 承

(3) 諸会議

ア 神山茂賞選考委員会

平成30年受賞候補者として複数件の推薦があり、8月8日(水)及び9月5日(水)に選考委員会を開催、慎重な審議の結果「はこだて外国人居留地研究会」を神山茂奨励賞受賞候補者として答申することとした。

イ 企画委員会

函館文化会が実施する事業の企画・立案に携わるとともに、その開催・運営にあたっている。本年度の委員会の開催日数はこれまで7回(持ち回り委員会を含む)で、主なる実施・担当した事業は次のとおりである。

- ・ 講演会の講師・演題等の協議及び運営

- ・ 市民公開講座の講師・講座内容等の協議及び運営

- ・ 「卓話」の講師・演題等協議及び運営

- ・ 「後援名義使用申請」及び「助成金交付申請」の審査

4 その他

(1) 函館文化会ホームページの運営

函館文化会の知名度の向上と事業活動推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び開催、報告などの情報をインターネットを通じて会員はもとより全国・世界に発信することを目的に平成29年4月1日に函館文化会ホームページを開設し運営を行っている。(アドレスは、<http://hakodate-bunkakai.com/>)

平成30年度 函館文化会 収支計算書

(単位：円)

科 目	予算現額	決算額	対予算比	備 考
I 事業活動収支の部				
1 事業活動収入				
基本財産運用収入	4,874,000	4,901,500	△ 27,500	
会費収入	264,000	278,000	△ 14,000	
事業収入	6,000	6,000	0	
寄付金収入	1,000	0	1,000	
雑収入	12,000	12,623	△ 623	
事業活動収入計	5,157,000	5,198,123	△ 41,123	
2 事業活動支出				
(1) 事業費支出	3,769,000	3,704,750	64,250	
①文化振興事業	2,854,000	2,794,545	59,455	
事務手当	1,374,000	1,374,000	0	
顕彰費	50,000	50,000	0	
会議費	420,000	418,897	1,103	
旅費交通費	175,000	157,270	17,730	
通信運搬費	70,000	60,226	9,774	
什器備品費	10,000	0	10,000	
消耗品費	50,000	49,482	518	
修理修繕費	10,000	0	10,000	
印刷製本費	265,000	262,170	2,830	
委託料	10,000	10,000	0	
賃借料	52,000	51,840	160	
諸謝金	188,000	186,370	1,630	
助成金	60,000	60,000	0	
負担金	95,000	94,200	800	
雑費	25,000	20,090	4,910	
②土地賃貸事業	915,000	910,205	4,795	
事務手当	225,000	225,000	0	
通信運搬費	8,000	8,168	△ 168	
工事請負費	173,000	172,800	200	
租税公課	400,000	399,600	400	
委託料	49,000	48,720	280	
振替手数料	55,000	53,510	1,490	
雑費	5,000	2,407	2,593	
(2) 管理費支出	1,486,000	1,437,572	48,428	
事務手当	704,000	703,500	500	
会議費	50,000	42,191	7,809	
旅費交通費	80,000	70,480	9,520	
通信運搬費	120,000	112,822	7,178	
什器備品費	10,000	0	10,000	
消耗品費	50,000	45,422	4,578	
修理修繕費	5,000	4,320	680	
印刷製本費	5,000	1,944	3,056	
委託料	160,000	161,839	△ 1,839	
賃借料	260,000	255,025	4,975	
租税公課	0	0	0	
負担金	5,000	5,000	0	
雑費	37,000	35,029	1,971	

科 目	予算現額	決算額	対予算比	備 考
3 法人税、住民税及び事業税	490,000	487,300	2,700	
法人税、住民税及び事業税	490,000	487,300	2,700	
事業活動支出計	5,745,000	5,629,622	115,378	
事業活動収支差額	△ 588,000	△ 431,499	△ 156,501	
II 投資活動収支の部				
1 投資活動収入				
特定預金取崩収入	250,000	250,000	0	
神山茂顕彰積立金取崩収入	150,000	150,000	0	
郷土資料等整備積立金取崩収入	100,000	100,000	0	
特定預金借受収入	200,000	200,000	0	
郷土資料等整備積立金借受収入	200,000	200,000	0	
投資活動収入計	450,000	450,000	0	
2 投資活動支出				
特定預金繰入支出	65,000	65,000	0	
退職給与引当金繰入支出	65,000	65,000	0	
特定預金返済支出	200,000	200,000	0	
郷土資料等整備積立金返済支出	200,000	200,000	0	
投資活動支出計	265,000	265,000	0	
投資活動収支差額	185,000	185,000	0	
III 予備費支出	50,000	0	50,000	
当期収支差額	△ 353,000	△ 246,499	△ 106,501	
前期繰越収支差額	496,600	496,600	0	
次期繰越収支差額	143,600	250,101	△ 106,501	

〈注記事項〉

- 投資活動収支の部 特定預金取崩収入は、次のとおりである。
「神山茂顕彰積立金取崩収入」は、「同積立金のうち 150,000円」を取崩し、「事業活動収支の部 事業活動支出 事業費支出 文化振興事業 顕彰費に50,000円、贈呈式関係経費に100,000円」を、「郷土資料等整備積立金取崩収入」は、「同積立金のうち 100,000円」を取崩し会報発行等経費に充てたものである。
- 投資活動収支の部 特定預金繰入支出は、次のとおりである。
「退職給与引当金繰入支出」は、退職手当支給に備え65,000円を積み立てたものである。

